

ある青年が革命的かどうかをみるには、なにを基準にするか。なにによつてその人をみわけるか。基準はたった一つしかない。つまり、その人が広範な労働大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行するかどうかをみるということである。労働大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行する人は革命的であり、そうでない人は非革命的か、あるいは反革命的である。

毛沢東

労働兵と結びつく道をあゆむ

労農兵と結びつく
道をあゆむ

外文出版社
北京

知識青年が農村へ行って、貧農・下層中農の再教育をうけることは、たいへん必要である。まちの幹部や他の人びとを説得して初級中学、高級中学、大学を卒業した自分の子供をいなかにおくらせるようにすべきである。ひとつみんなで動員をおこなおう。各地の農村の同志はかれらがいくのを歓迎すべきである。

毛 沢 東

ある青年が革命的かどうかをみるには、なにを基準にするか。なにによってその人をみわけるか。基準はたった一つしかない、つまり、その人が広範な労農大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行するかどうかをみるということである。

毛 沢 東

編集者のことば

はやくも三十年まえ、われわれの偉大な指導者毛主席は「青年運動の方向」という輝かしい文章のなかでつきのようにつっこんで指摘している。「ある青年が革命的かどうかをみるには、なにを基準にするか。なにによってその人をみわけるか。基準はたった一つしかない、つまり、その人が広範な労農大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行するかどうかをみるというところである。」ここで、毛主席は広はんな革命的知識青年に唯一の正しい方向をさし示している。

三十年らい、中国の広はんな革命的知識青年は、毛主席のさし示した、知識分子が労働者、農民、兵士と結びつく道にそって前進し、新民主主義革命と社会主義革命のなかできたえられ、しかるべき貢献をした。

知識青年が農山村にいったて労農大衆と結びつく道を進むことは、社会での一大革命である。この問題をめぐって、いままでずっと二つの道、二つの路線、二つの思想のあいだではげしい闘争がおこなわれてきた。毛主席のプロレタリア革命路線は、知識青年が労農大衆と結びつく道を進み、農村における三大革命闘争のあらしのなかで、自分を確固としたプロレタリア革命事業の継承者にきたえあげよう、要求している。それにひきかえ、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇の反革

命修正主義路線は知識青年が農山村にゆくことを、名声や地位を勝ちとり、立身出世のための手段とみなすよう要求し、知識青年を資本主義復活の横道にひきずりこもうと夢みていた。あらゆる汚物を洗いおとした今回のプロレタリア文化大革命は、劉少奇が知識青年の農山村行きの問題でばらまいたいろいろな謬論を粉砕して、知識青年が労働者、農民、兵士と結びつくかつかつてない広びろとした道をきりひらいた。

プロレタリア文化大革命の鍛練と試験をうけた広はん知識青年は、いままでよりもいちだんと生氣はつらつとしており、闘志にみちあふれている。農村、辺境、工場や鉱山、末端単位にいつて労働者、農民、兵士から再教育をうけることは、重大な戦略的意義をもつ革命的措置であり、なんぼなんぼ千万というプロレタリア革命事業の継承者を育成し、養成することにかかわる大きな問題であり、プロレタリア階級独裁をうちかため、資本主義復活をふせぐ百年の大計であり、社会主義祖国の建設にとって必要なことであり、深刻な思想大革命である、と広はん知識青年ははっきりと理解している。

毛主席はさいきん、「知識青年が農村へいつて、貧農・下層中農の再教育をうけることは、たいへん必要である」と呼びかけている。こんにち、中国では広はん知識青年の農山村行きの高まりがもりあがっている。いく千万の革命的知識青年が毛主席のさし示す革命の航路にそって勝利のうちに前進している！

本書におさめられている七つの文章には、中国の革命的知識青年が労働者、農民、兵士と結びついて階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動のなかで、たたかいながら成長してゆくすんだ事跡がしるされている。

目次

広びろとした天地で成長する……………	『人民中国』誌記者……………	1
生涯労働者と結びつく……………	潘玉銘……………	35
農村での十年間……………	邢燕子……………	47
毛沢東思想にはぐくまれた新しい型の農民……………	『人民日報』通信員……………	63
確固として毛主席のさし示す輝かしい道をつきすすむ……………	陳恵明……………	75
永遠に貧苦牧民のよき継承者になりたい……………	吳小明……………	89
毛主席の教えにしたがい……………	……………	……………
いつまでも貧農・下層中農に奉仕する……………	新華社記者……………	103

広びろとした天地で成長する

——河南省郊県広闊天地大有作為人民公社に知識青年を訪ねて

『人民中国』誌記者

さきごろ、ある人民公社を訪ねた。「広闊天地大有作為人民公社」というすばらしい名の公社だ。所在地は広大な華中平原の一角、河南省の郊県。この地に足をふみいれて何よりも強く印象づけられたものがある。

それは、家々の白カベにあざやかに書きしるされた、「農村にいつて活動できるこうしたすべての知識分子は、みなよろこんでそこへいくべきである。農村は広びろとした天地であり、そこでは大いに力を発揮することができる」という毛主席の教えである。

この公社には青年がとくに多いようだ。耕地や脱穀場、建設現場など人びとの働くところにはすべて健康そのものの若い男女の姿がみられ、かれらの歌ごえがいたるところでひびいていく。かれらのほとんどが、農村や山地へゆくようにとの毛主席の呼びかけにこたえて、この十

数年間に都市からやってきた知識青年だ。かれらに接しているうちに、共通の特徴を見出した。それは、さきにかかげた毛主席の偉大な教えを忠実に実践したため、かぎりない力と誇りにみちあふれている点である。それはもちろんかれら青年たちだけではない。白髪の老人から、五つや六つの子どもにいたるまで、みんなが毛主席の教えを心に深くきざみつけ、毛沢東思想ですべての行動を律するようつとめているのである。

十数年前まで村の幹部をしていた老貧農の黄聚恩老人は、ひじょうに興奮した面持ちで、人民公社の名の由来を話してくれた。

「一九五五年のことです。わしらの公社の前身、大李荘郷が『村の協同化計画実施の経験』という文章を発表した。この文章のなかで、農業生産に参加するよう知識青年を組織するという問題にふれた。毛主席はこの文章をお読みになってひじょうに注目され、有名な『中国農村における社会主義の高まり』という書物に収録されたばかりでなく、この文章のために編集者のことばをお書きになった。いま村の家々のカベに書いてあるあの語録もそのなかにふくまれている。……」

公社員はみんな、偉大な指導者毛主席へのかぎりない熱愛と忠誠心をしめすために、公社の名を「広闊天地大有作為」（農村は広びろとした天地であり、そこでは大いに力を発揮することができるときめた。）

ところが、毛主席の偉大な指示が公社員の心に日一日と深く根をおろしているとき、最大の裏切り者劉少奇が一九五七年にこの地方の中心都市の許昌にやってきた。劉少奇は、わざわざ中学生をあつめて話をした。そして、毛主席の偉大な指示に公然と反対をとまえ、「帰郷箴付・出世論」というばかげたことをさかんに吹聴した。「きみたちは農村へいったら、ほかは何もしないで、四、五年のあいだ、まじめに畑を耕すがよい」そうすれば、やがては「県の幹部や省の幹部になれる。中央にゆくこともできる」などとデタラメを言った。……河南省における劉少奇の代理人も、その尻馬にのってわめきたて、同じような黒いしろものをいたるところにふりまいた。

知識青年争奪のたたかいはげしく展開された。

革命のよき継承者

毛主席がみずから筆をとって示された広びろとした天地は、青年たちの心を燃えさせた。

十数年このかた、毛主席のさし示す航路にそって、かれらはつぎつぎにこの広びろとした天地にやってきた。そのうちのある者は帰郷したものであり、ある者は大都会に生まれ育ったが、労働者、農民、兵士から再教育をうけるためにきたのだ。いま、この公社にはそうした知識青年が四百三十八名いる。かれらは社会主義新農村の建設とプロレタリア革命事業のたしかな継承者になるため大いに力を発揮している。

モーターがうなりをあげるポンプ井戸のかたわらで、たくましい若者の姿をみつめた。両足はドロまみれ、大きな手の平はマメだらけだ。

「この若者は盧忠陽。一九五八年に、村に帰ってきた知識青年。いまは県革命委員会常務委員、公社革命委員会副主任をしている」とまわりの人びとが紹介してくれた。

「生えぬきの農民かと思いましたがよ」と言うと、かれは笑いながら、

「修正主義になるのを防ぐためには、つねに労働しなくちゃいかんし、大衆と心をひとつにしていなけりゃいけません」と言って、十年まえ、村に帰って農事にたずさわるまでの経過を話してくれた。

一九五八年の春、邳県の高級中学で学んでいたかれは、帰郷して農業をやりたいという願書

を学校当局に出した。このことが学校当局に大きな衝撃をあたえた。党内ひとにぎりの資本主義の道をあゆむ実権派は、かれをまるめこもうとした。「きみは成績がよいから、卒業したらかならずよい大学にうかる。ほかの者は上にあがりたくてもハシゴがない。きみはそのハシゴをもっているのに上にあがりたくないという。将来どうなってもいいのかね」

……その夜、かれは灯光のもとで、毛主席の著作をひもといた。輝かしい文字がかれの目にうつった。「ある青年が革命的かどうかをみるには、なにを基準にするか。なにによってその人をみわけるか。基準はたった一つしかない、つまり、その人が広範な労働大衆と結びつくことをのぞみ、しかもそれを実行するかどうかをみるということである。」偉大な指導者毛主席の教えは、かれの心をはげしくゆきぶり、ながいあいだしずまらなかった。

——解放前、わが家は先祖代々地主から作男としてこきつかわれてきた。学校の門をくぐることさえできなかったのだ。いま、自分は高級中学で学んでいる。これはひとえに毛主席のおかげだ。貧農としての素地をぜったいに忘れてはならない。

そこで翌日、学校当局にきっぱりと回答した。

「毛主席のさし示した道を、ぼくはあくまですすみます。党と人民がもめているもの、そ

れがぼくの前途なのです。ぼくがたたかう場所は農村なのです」

かれは二度も三度も願書を学校当局に出し、さまざまな障害を突破して、ついにふるさとの土をふんだ。

村に帰ると、貧農・下層中農はわが子いじょうにいつくしんでくれた。古くからの党支部書記はつねにかれを身近におき、階級闘争のあらしのなかで、すすむべき道をさし示して、かれの階級意識をたかめてくれた。貧農の老人はかれの手をとって畑仕事を教えてくれた。うねの立て方、タネのまき方など、何から何まですっかり伝授してくれた。かれもまた、謙虚に貧農・下層中農にまなんだ。こうして若い学生はまたたくうちに大地に根ざす農民となった。

さいきんいろんな活動をうけ持つようになったが、かれは労働をないがしろにしたためしがない。そうしたかれを「完全に」「徹底的に」人民に奉仕するよい継承者だ、と貧農・下層中農は口々にほめている。

ここでもうひとり、梁秀英という女子知識青年に会った。かの女は、一九六四年、初級中学を卒業すると、革命の心にもえて農業の第一線にかけつけた。村に帰ると、翌日には母の手か

らスキをうけとり、野良に出た。はじめのころ、若者たちといっしょに仕事しながらしゃべったり笑ったりして、かの女は愉快だと感じた。ところがまもなく、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇のとなえた「進学出世論」がかの女の心をむしばんだ。ある日、仕事につかれて家に帰ったかの女は、スキをほうり出すと、ごろりとオンドルに体をなげ出して、ぶつぶつとつぶやいた。

「……中学を卒業したというのに、一日じゅう、土いじりだなんて、ほんとうにいやになる……」

いらい、かの女は農作業はうわの空で、ほかのことばかり考えるようになった。それをみて父母は、「憶苦思甜会」（解放前の階級の苦しみを思いおこし、今の仕合わせをかみしめる会）を家族だけでひらいた。母親は涙ながらに解放前の社会でなめたみじめな生活を娘に話してきかせた。

「あの時分、おまえの父さんは地主のやつに作男として休む間もないほど働かされたんだよ。それにもかかわらず一度もまともにご飯が食べられなかった。年の瀬の迫った十二月に、飢餓をさけるために一家で村から逃げ出した。おまえの姉ちゃんは食べるものがなくて死んだ

のだよ」

秀英さんははじめのあいだは上の空だったが、聞いているうちに、胸をしめつけられる思いがした。父親は娘を毛主席の肖像のまえにつれてゆき、

「わしら一家を救って下さったのはほかでもない、毛主席なんだ。おまえは仕合わせな身でありながら仕合わせがわかっていない。学校ですこしばかり勉強したからといって、勤労人民を見さげるのは貧農としての素地を忘れた証拠だ」と心をこめてさとした。

秀英さんは自分の間違いに気がついた。

「毛主席！ わたしはあなたの教えにそむいていました。これからは、どんなことがあっても、あなたの教えをまもります。汗水たらして働き、その汗でわたしの頭のなかに巣くっているブルジョア思想をきれいに洗い落とします。わたしは広びろとした農村で一生働きつづけます！」——毛主席の肖像のまえで、かの女はおごそかに誓った。

このご、生産隊の耕地では、さわやかなかの女の笑声がふたたび聞けるようになった。だが人の思想をあらためるのはなまやさしいことではない。ある日、生産隊で小麦の脱穀をしていたとき、とつぜん、黒雲が空をおおい、風が強くなった。生産隊長は小麦をすぐ倉庫に入れよ

と叫んでまわった。その声を聞いて梁秀英さんは門口に立った。そこへ雨がざーっと降り出した。ひどい吹き降りに思わず足がすくんだ。

「ゆくのはやめよう。ひとりやふたり欠けてもたいしたことはないだろう」と思ったとき、ひどい吹き降りのなかで、わが身を忘れて働く老貧農の姿が目に入った。表へとび出してたかいい加わるか、それとも家のなかでのんびり休んでいるか。ふたつの考えがはげしく渦巻いた。だが、かの女はやはり表へとび出した。貧農・下層中農にまじって小麦の束をすっきり取りこんだ。ずぶぬれになったかの女の姿をみて、貧農・下層中農が、「りっぱなもんだ」と口をそろえてほめてくれた。だが、その後何日もかの女は考えが渦巻いた。

「貧農のおじいさんたちは、何事でもまず生産隊の考えを考えるのに、わたしは自分のことを考えてしまう。なぜだろう？」とかの女は考えた。そうして、もっともきれいなのは労働者や農民であるという毛主席の教えが偉大な真理であることを、かの女ははじめて深く理解した。自分の頭のなかにある古い思想をなくすには、どうしても全力をあげて世界観をあらためなければならぬ、とかの女はさとした。以後数年、かの女は苦しい試練によくたえ、いまだ革命事業をうけつゞ新人としてりっぱに成長した。貧農・下層中農はかの女を「りっぱな

娘」と呼んでいつくしんでいる。

盧忠陽さんや梁秀英さんのように、すくすくと成長した知識青年がここにはたくさんいる。かれらは、毛主席の偉大な指示にはげまされて、中国のフルシチョフ劉少奇とその代理人が設けた数々の障害を突破し、労働者、農民、兵士と結びつく広びろとした道を大またでつきすすんでいる。

貧農・下層中農の最初の教え

さきごろ、河南省の省都鄭州から知識青年七十一名がこの地にきて住みつくことになった。その知らせが伝わると、県内はわき立った。公社の貧農・下層中農たちは、早々と自動車道路に出迎えた。雨が降り出したが、だれもその場を離れようとしないう。紅衛兵の若者たちが到着した。貧農・下層中農はどっとかけより、紅衛兵から背のうや荷物を取りあげ、「ほんとうによくきてくれた！」と口々に言いながら公社に向かった。

公社員となった青年たちは、自分たちの住む家に案内された。戸をあけると、寝台や机、椅子などの家具がすっかりととのっている。炊事場にゆくと、水ガメに水が満たしてあり、かま

どには火も入っている。何から何までそろっているのだ。それでもなお、何か足りないものはないかねと、貧農・下層中農の公社員たちは気をつかってくれる。こうした革命の大家庭の暖かさにふれて、青年たちは胸が熱くなった。

これら知識青年たちは学校の門を出たばかりで、いわばもえ出た若芽だ。風雨にさらされたことがなく、世間のことは何も知らないのである。しかも、程度の差こそあれ、中国のフルシチョフ劉少奇の修正主義教育路線に毒され、労働者、農民を軽視し、労働を軽んじる考えをもっている。こうした青年たちを革命事業をうけつぐはがねのような人間にきたえあげるにはどうすればよいか。

青年たちを迎えてから貧農・下層中農はそのことを日夜考えつづけた。かれらは、「この若者たちはわしらのそばにやってきたんだから、よく手をとってみちびいてやらにゃあならん。そうして、毛主席に安心していただくのじゃわい」と言うのであった。青年たちの心にいつまでも解放前の階級的苦しみをきざみつけ、革命のむずかしさをわからせるために、貧農・下層中農がまず手がけたのは、階級教育だった。

鄭州第九中学から小辛莊生産隊にきて住みついた七名の青年が昼食の用意をしていた。そこ

へ貧農の梁おばあさんが入ってきた。

「さあみんな、炊事はやめて、わしの家へお客にくるんじや」
青年たちは、迷惑をかけては悪いと思ひ、えんりよした。

「いいや、ひとりのこらず、みんなきなさい。話しておきたいことがあるんだから」とおばあさんは声をきびしくした。

そうしたおばあさんの様子を見て、青年たちはことわれず、そとへ出た。おばあさんはかれらを家に案内し、食事を出した。見ると、ヌカでつくった団子と雑草を浮かべた汁ではないか。青年たちはすべてをさとった。おばあさんが自分たちをまねいたのは、解放前の階級的苦しみを味う食事——「憶苦飯」を食べさせるためだったのだ。おばあさんがすすめた。

「さあ、食べなさい……」

ことばが終わらないうちに、おばあさんの目には涙が浮かんだ。旧社会にたいするかぎりない憎しみがわきあがる。おばあさんは、自分のつれあいが物乞いにゆき、地主の飼犬にかみつかれて血まみれになったときの情景を語った。このとき、おじいさんが立ちあがり、ズボンのすそをまくりあげて、その傷あとを出してみせた。青年たちはおじいさんをつりかこんでそ

の傷あとをみた。おさえきれない怒りをこぶしにこめて青年たちはさげんだ。

「階級的苦しみを、血涙にじむ恨みをいつまでも忘れない！」

おばあさんは涙をぬぐいながらなおも語った。

「それなのに、最大の裏切り者劉少奇は『搾取には功績がある』とか『搾取は人を助ける』とかほざきおった。あいつは人間の皮をかぶったオオカミだ。あいつはわしらにふたたび解放前の苦しみをなめさせようとした大悪人だ。そんなことを許せるじやろうか」

「ぜったいに許せない！」青年たちは声をそろえてきっぱりと答えた。

そのとき、おじいさんが、かたわらの天秤棒をとりあげて言った。

「これはわが家の宝だ。解放前、わしはこれでわが子をかつぎ、飢饉をのがれるために物乞いをして歩いた。解放後には、これをつかって社会主義新農村の建設にはげんだ」

おばあさんも顔を明るくほころばせて、『毛主席語録』をひらき、一字一句でいねいに読んで聞かせた。

「世界はきみたちのものである。中国の前途はきみたちのものである。」
読み終わると、おばあさんは青年たちを上げました。

「わしらの村は、毛主席がみずから筆をとって指示をお書きになったほどの村じゃから、あんなたちも、いつまでも毛主席の教えをまもって、広びろとした天地に根をおろし、花を咲かせ、実を結ぶようにしておくれ」

なまなましい階級教育が終わった。青年たちはそこからかぎりない力をくみとった。

「これまで学校で十年年も学んだが、こうした教育はこんどがはじめてだ」と青年たちはみな口をそろえて言った。

老貧農の多くは、こうした方法で若い世代を啓発し、青年たちの理想を階級の運命、革命の前途としっかり結びつけていった。

階級闘争のあらしのなかで成長

「階級闘争、生産闘争、科学実験は、強大な社会主義国を建設するための三つの偉大な革命運動である……」と毛主席はのべている。知識青年たちは、農村というこの広大な天地で、階級闘争、生産闘争、科学実験という三大革命運動の第一線に立ち、鍛えられ試されているのだ。かれらは農村での二つの階級、二つの道のはげしいたたかひのさなかで、階級敵とはげし

くたたかひ、糖衣砲弾による攻撃をうちしりぞけて、つぎつぎと勝利をおさめてきた。

生産隊の会計係りをしている寇振京さんは、そうした青年のひとりだ。一九五九年から一九六一年にかけて三年つづきの自然災害のころ、村のある投機分子が、ある日、寇振京さんの家に訪ねてきた。相手はことば巧みに生産隊の多額の公金を綿花の買付けにまわすようにとかれをそそのかした。「いいかね、こんなにぼろい商いはないよ。金が入りゃあすぐに穴を埋めておく。そうすれば他人に知れる気づかひはない。どうだ、いっしょにやらんかね、けっしてあんたに損はさせんから」

それは明らかに法律違反である。かれはその申し出をきっぱりとはねつけた。だが、そのことがあってから幾夜もねむれなかつた。「あいつはなぜぼくを突破口にしようとならったのか」と自分に問いかけてみた。その答えをもとめて、毛主席の著作をひもといた。

「銃をもった敵が消滅されてからも、銃をもたない敵は依然として存在する。かれらはかならずわれわれに死にもの狂いのたたかひをいどんでくる。われわれはけっしてこれらの敵をみくびってはならない」と毛主席は教えている。

この教えを学んで、心のなかが明るくなった。「なるほど、あの男が銃をもたない敵だった

のか。階級闘争の意識の未熟なばくに攻撃をかけてきたんだな。どうしても警戒心をつよめなければいけない」

意外にも数日後、その男がまた訪ねてきた。かれはがまんがならず、すぐさま相手の破壊活動を大衆のまえで暴露し、階級敵を白日のもとにさらけ出した。かれはこの闘争で、自分をきたえ、プロレタリア階級の立場をいっそうゆるぎないものにした。村に帰っていらい十三年、かれは会計係りをつづけている。貧農・下層中農は、かれを集団経済の「りっぱな管理人」だと称賛している。

史上に前例のないプロレタリア文化大革命のなかで、この地の知識青年は階級闘争の試練をうけた。この試練はかけがえのないものだった。こうしてかれらは農村革命の新しい力になった。

プロレタリア文化大革命がはじまると、かれらはすぐさま貧農・下層中農とともに党内ひとにぎりの資本主義の道をあゆむ実権派に造反した。最大の裏切り者劉少奇が河南省に配置していた代理人は肝をつぶし、あわてて工作组をこの地におくりこんで、勢いよくもりあがった革命の大衆運動に弾圧をくわえた。工作组は村につくと、ホコ先をこの村に長く住みついて体験

をつんでいる革命的幹部王延太同志に向けた。闘争の大方向をそらそうとしたのだ。「王延太がこの地に流した害毒は根深い。われわれはそれを消毒にきた」と工作组の連中は称した。

貧農・下層中農はそれを聞いてげげんに思い、知識青年たちに相談をもちかけた。

「あの連中はとんでもないことをぬかす。王延太同志はこの村で、わしらが毛主席の著作を活学活用するのを手引し、自然改造のたたかいを指導してくれる。何事につけてもわしら貧農・下層中農のために考え、つくしてくれる。王同志は毛主席の革命路線を実行するりっぱな幹部であるのに、それをあの連中は『消毒』するなどと言う。何か悪だくみがあるにちがいない」

青年たちは身を挺しておどり出た。かれらは工作组とまっこうからたたかった。

「王延太が流した害毒は根が深い。きみたちはだまされている」と工作组は言う。

「村の西北にあるポンプ井戸は王延太同志がわれわれを指導して掘ったものだ。三十数メートルもある深井戸だ。『消毒』するなら、あれを埋めるがいい！」と青年たちは胸をはって言いかえした。

「きみたちは保守派だ」

「何を言う、われわれは毛主席の革命路線をまもるんだ！」青年たちはきっぱりと答えた。工作組は青年たちの堂々たる答えにかえすこともなく、部屋に身をかくしてしまった。青年たちは工作組のところにおしかけ、論争した。工作組を追い返す大字報も書いてはり出した。工作組はいたたまれなくなり、夜逃げみたいにして引きあげてしまった。

青年たちは農村での二つの路線のたたかひの試練をうける一方、たえずブルジョア階級による青年奪取の試練をうけた。中国のフルシチョフ劉少奇をかしらとする党内ひとにぎりの資本主義の道をあゆむ実権派は、資本主義復活の準備として、青年を修正主義の邪道にひきずり込もうと考えていた。

一九六六年の夏のある日、県城からこっそりとやってきた男が、盧忠陽さんにこう言った。

「町に来ないか？ きみのように有能で信望のある人間は、町にいつて革命をやれば、いっばしの幹部になれることはうけあいだ。こんな貧乏村にかじりついていることもあるまいが！」それを聞いて盧忠陽さんは憤慨した。

「ぼくは農民の子だ。そんな高のぞみはしない」とかれはきっぱりとことわった。

相手はしつようにからみついてきたが、けっきょく、何もうるどころなく、すげすごと帰っ

ていった。

それから数日後、県から電話と手紙でかれに出てくるよう催促してきた。かれはいぶかりながら県城へいってみた。すると一部の者から「手厚いもてなし」をうけた。まづりっぱな部屋に案内され、「県当局の決定だ。ここで県全体の学習指導にあたってもらいたい」と命じられた。地位でつろうというのだ。相手のたくらみをただちに看破したかれは、

「毛主席は、農村という広びろとした天地でたたかうようにとぼくたちに教えている。ぼくは一生、農村の陣地をまもりとおすつもりだ。きみたちがどんなうまいエサをつかっても、ぼくをつりあげることにはできない！」と言いつて部屋を出ると、その足で町を素通りして、農村という広びろとした天地へと帰ってきた。

プロレタリア文化大革命の烈火にきたえられて、青年たちの精神はさらに一新された。かれらは、劉少奇がデッチあげた「進学出世論」「帰郷箔付・出世論」などというばかげた説を徹底的にたたいた。

「これは羊頭やうとうをかかかてて狗肉くにくを売る手口だ。劉少奇はブルジョア階級のくさはりはてた立身出世の思想でぼくらの魂をむしばもうとした。かれがぼくらを修正主義の道へとひきずり込

もうとする以上、ぼくらはかれの陰謀をいよいよあばきたてて、ワナにかからないようにし、毛主席がさし示される道をあくまでもすすまなければならぬ」とかれらは憤りをぶちまけた。

生産労働の面でもよき働き手

青年たちは、広びろとした天地につくと、学生時代の服をぬぎすて、野良着に着替えた。風が吹こうと雨が降ろうと、ドロのなかでも水のなかでも、もっとも苦しい仕事にとりくんだ。貧農・下層中農から再教育をもらったおかげで、かれらは農業生産のよき働き手になっていった。

数百年らい、この地の人びとはずっとひどい早ばつにおびやかされてきた。耕作はまったくお天気まかせだったのである。

近くには水量のゆたかな汝河が流れているのだが、農民には何の役にも立たぬどころか、毎年洪水になって肥えた土をごっそりおし流してしまった。そのため、解放まえには多くの者が路頭に迷い、他郷をさすらう破目になるのだった。

解放後、広はんな貧農・下層中農は土地を分けあたえられ、やがて協同化の道へとつきすすんだ。だが、早ばつの脅威はとりのぞかれたわけではなかった。人びとがこの大自然にいとむ決意と力をもったのは人民公社が生まれてからである。人びとは水利施設の建設にとりかかった。

一九六四年、盧忠陽さんは生産大隊の党支部書記にえらばれた。

かれは貧農・下層中農とともに、毛主席著作の活学活用につとめ、生産を勢いよくもりあげていった。

「世の中のあらゆるもののなかで、人間がいちばん大切なものである。共産党の指導のもとでは、人間さえいれば、この世のどんな奇跡でもつくりだすことができる。」この毛主席の教えを、かれはくりかえし学んだ。

そうだ、人びとをひきいて大自然にいとみ、早ばつを一掃しよう、とかれは決意をかためた。

その夜のうちに、幹部や老いた農民、知識青年をよび集め、汝河の水を引いて灌漑にあてようではないかと提案した。この提案にはみんな大よろこびだった。老貧農たちはかれの肩をた

たいて言った。

「あなたはわしらの気持ちをよく察してくれた。水さえあれば穀物はみゆる。水が穀物なんだ」

青年たちは人一倍はり切り、めざましい働きをしようとその日の訪れをまっていた。

一九六五年の春、盧忠陽さんは貧農・下層中農、知識青年あわせて二百余名をひきつれて施工现场にかけた。凍った大地にツルハシ、シャベルをふるい、用水路工事のたたかいはじまった。多くの老貧農は、厳寒をもとめせずに現場にとまりこみ、食事もそこでした。これが大自然にいとむ青年たちの雄志をいっそうかりたてた。

たたかいは七十五日間にわたった。ついに、汝河の水を引く六・五キロの用水路が完成した。これによって三千ムー（一ムーは六・六六七アール）の耕地がうるおい、この年の夏の収穫は前例のない大豊作となった。

だが、これで水の問題がすっかり片づいたわけではない。用水量のふえる夏になると、汝河の上流兩岸でも水の消費量がふえる。したがって川の水位がさがり、用水路は十分に力を發揮できなくなるのだ。

盧忠陽さんは、毛主席の著作『愚公、山を移す』をふたたび学んだ。老いた愚公の姿がありありと目の前に浮かんできた。愚公は二つの大きな山を移した。毛沢東時代の新しい愚公であるわれわれが地下から水を取り出すことができないはずはあるまい、とかれは考えた。

井戸掘りについては、地もとの人びとに忘れられない思い出がある。先祖代々いくど井戸掘りをくりかえしたか知れない。だが、流砂をおさえることができず、水が出ると、井戸壁がすぐにくずれ、そのつど失敗した。盧忠陽さんは大衆を動員して案をねった。困難にぶつかるど、毛主席の著作をひもといた。こうしてついに、この地でおこなわれた井戸掘りの経験と教訓をしめくることができた。それをふまえて、大地から水を汲みあげるたたかいの火ぶたをきった。

もう初冬で、大地はかたく凍っていた。

盧忠陽さんは、二、三十人の青年をともなつて井戸掘りの現場にいった。村の老人数名も「技術顧問」としてまねかれてきた。ポンプは凍りつき、ぬれた服もカチカチだ。しかし、無敵の毛沢東思想で武装したはがねの戦士はどんな困難にもひるまない。かれらは毛主席語録を高らかに朗読した。

「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかいろう。」朗読の声は井戸の底から、井戸のまわりからわきあがり、広びろとした天地にとどろき渡った。

作業はすすんずみ、六メートルあまりの深さにたった。すると、流砂の層が現われた。工事は一時中止された。盧忠陽さんは、「大衆こそ真の英雄である」という毛主席の教えにしたがい、ただちに幹部、老人、知識青年をあつめて現場会議をひらいた。発言は活発だった。そのときにまとまった案はこうだ——掘りすすんだところに囲いをする。その外がわをアシのむしろでかこむ。こうすれば流砂が防げるといふ見込みであった。

たたかいは再開された。流砂はついにくいとめられた。井戸掘りはみるみるすすんだ。あまり深い井戸なので、モーターは井戸のなかにとりつけなければならぬ。青年たちは先を争って井戸のなかにおりようとした。それを盧忠陽さんがおしとどめた。

「なかは危険だ。ほくがやる！」

盧忠陽さんは井戸のなかで懸命に仕事をつづけた。とつぜん、井戸壁がぐずれ落ちてきた。かれは土にうずもれた。人びとは急いでかれを救い出した。やがて意識をとりもどしたかれが最初に口にしたのは、「工事はすすんでいるか」ということばだった。

急をきいて、村の貧農・下層中農がひとり残らず見舞いにかけてくれた。薬酒やタマゴなどもってくる者もあった。

「井戸掘りだというて、あぶない仕事ばかり引きうけるそうじゃが、もしもほんとにうずもれて死んだら、穀物がいくらふえてもわしらは食えん、のどをとおらんわい！」人びとは感動をこめてそう言った。

事故から三日後に、盧忠陽さんは傷の痛みをかくして工事現場にもどってきた。

このように、二十数日間にわたる奮闘のすえ、人びとは村の歴史はじまっていらい最初のポンプ井戸を掘りあげた。モーターのうなりにつれて地底から水がはげしくふき出すようになったのである。

人びとは二年の冬と春を施工期にあててがんばり、ポンプ井戸二十七を完成した。スイッチを入れると、公社の耕地七千ムーは数日であうおうようになった。

これまで早ばつに悩まされてきた公社は、井戸と用水路の力で、早ばつや冠水を克服して豊作を確保できるようになった。一九六七年の穀物の収穫高は、井戸のなかったころの倍以上にふえた。そして、一九六八年の小麦の単位面積あたりの収量は、これまた前年の一割以上の増

加であった。

この十数年らい、この地の知識青年は労働することを自己改造に欠かせないものとみなしてきた。かれらの出勤率は、毎年最高は三百十余労働日、一般でも二百七十余労働日を記録している。これは地もとの貧農・下層中農と大差がない。

「知識青年の体にはわしらとおなじだけのドロがついておる。手の平のママの厚さもわしらとおなじくらいだ」と貧農・下層中農は心からよろこんでいる。

このことは、都市からきた知識青年の圧倒的多数が貧農と下層中農から再教育をうけ、生産労働のなかでできたえられて、よるこばしい成績をあげていることを物語っている。青年たちは貧農・下層中農との心のつながりをいっそうつよめているのだ。

科学実験の先鋒

楊荘生産大隊の耕地のそばに人目をひく大きな木札が立っている。それには「小麦、トウモロコシ、目標額各五百キロ」と書いてある。畑は小麦の若芽でみどりのじゅうたんをしきつめたようだ。老貧農がそれを指さしながら、うれしそうに教えてくれた。

「一九六八年にはこの畑で奇跡がおこった。一ムーあたり小麦は五百十五キロの収穫だった。この成績をあげたのは村に帰ってきた十五人の知識青年でな、平均二十三歳という若者たちだ」

もっとよく知りたいと思ってくくと、青年実験小組の同志たちをたずねるようと老人は提案した。

青年実験小組の組長は周進安さん、今年二十六歳、一九五九年に高等小学校を卒業した青年だ。大きな目をかがやかせながら、小組がおこなってきた科学実験の歩みを説明してくれた。

小組ができるまで、この生産大隊の小麦の収穫高は一ムーあたり最高が六十五余キロどまり、綿花は十キロ、トウモロコシは百十余キロでしかなかった。よそにおとるこの現状を一変させたいと考える老貧農たちは、

「仕事をするのは人間、畑をつくるのも人間だ。あんたらは教育をうけておる。わしらも『農事の心得』というものをもっておる。力をあわせて実験をすれば、かならずよい収穫高があがると思うが、どうかね」と青年たちに相談をもちかけた。

青年たちもおなじことを考えていたから、待ってましたとばかりに気をはやらせた。すぐに

でも始めたい様子である。

そうしたいきさつで、一九六五年の秋、小麦のまきつけ前に、楊荘の知識青年十五人は、生産大隊の党支部の指導と支持のもとに、数名の貧農・下層中農といっしょに科学実験小組をつくった。科学実験をすすめる、この地の低収穫を克服し、自分をきたえよう、とかれらは決意した。生産大隊では実験用の土地と経費を支給してくれた。かれらは小麦一ムーあたりの目標額五百キロとするした木札を畑のかたわらに立て、意欲をもやして実験にとりかかった。

かれらは、何事をするにも毛主席の教えにしたがい、謙虚な態度で貧農・下層中農に学び、理論と実践を結びつけるようにした。面積三ムーの実験田の小麦は一九六六年に一ムーあたり三百五十余キロの収穫をおさめ、それまでの地もとの一ムーあたり五十余キロの七倍というめざましい増産ぶりをしめた。五百キロの目標は突破できなかったけれども、地もとにおける最高記録をつくったのである。

大衆からほめそやされて、青年たちは有頂天になってしまった。ふるい学校で修正主義教育路線に毒されたものがよく洗い落とされていないので、「立身出世」をのぞむブルジョア思想がまたも頭をもたげた。一九六七年になると、かれらはいっしょに実験してきた貧農・下層中

農をのけ者にして、自分勝手なことをやるようになった。貧農・下層中農の意見などは耳に入るはずもない。自分たちの考えどおりにやれば、五百キロの関所を突破し、みんなをあっといわすことができる、とかれらは考えたのだ。ところが、そうはいかなかった。管理がまずく、水や肥料をやりすぎたのが原因で、小麦は後期になってひどい倒伏をおこした。その結果、一ムーあたり二百二十キロしかとれず、五百キロの関所を突破するどころか、はじめの年より百余キロもの減収になってしまった。

さまざまなうわさがばつとひろがった。階級敵はこのときとばかりに、かきまわしにかかった。「あの青二才どもが五百キロとれた日にゃ、おんどりがタマゴを生むわいな！」などと言った。

困難にぶつかって気を落とすものもあった。「科学をやるだけの実力をぼくたちは持ち合わせていない。学校に長くあがっていたわけでもないし、学力も、実験用具もない。早々にやめたほうがいいんじゃないか」と言い出すしまった。

このかんじかなめの時に、年若い生産隊長の周遂娃さんが赤くかがやく宝の本をたずさえて、小組に姿をみせた。かれはほかのことには一切ふれず、みんなをあつめていっしょに、

「新たに生まれたどのような事物の成長も、すべて困難や曲折を経なければならぬ。社会主義事業のなかで、困難や曲折を経ず、大きな努力を払わず、いつも順風に乗って、たやすく成功をおさめられると思うなら、そうした考え方は幻想にすぎない」という毛主席の教えを学んだ。

「わしらが科学実験をするのは、社会主義を建設するためなんだ。個人の立身出世をはかるためではない」とかれは深い意味をこめて言った。多くの貧農・下層中農も援助の手をさしの場合、「失敗は成功のもと。つまづいたら起きあがるんだ」と力づけてくれた。

青年たちはじつくりと腰をすえて「老三篇」（『人民に奉仕する』『ベチューンを記念する』『愚公、山を移す』）をくりかえし学び、失敗のなかの教訓を真剣にしめくくった。

実験に失敗した原因は多いが、もっとも根本的な原因は、毛主席の教えにそむき、貧農・下層中農と結びつかなかったことだった。かれらは劉少奇の「劣農軽視」「技術第一主義」「立身出世」などという反革命修正主義のしるものを憤怒をこめて批判した。知識分子という思いあがりですて、はじめに貧農・下層中農に学ぼうと決心した。そして全員が闘志をもちやしてまた新しい実験にとりかかった。こんどは生産大隊でももっとも経験ゆたかな老貧農を「参謀」

にまねいた。小麦のまきつけ前に、かれらは畑で会議をひらいた。「参謀」の老貧農は多年の経験をふまえて、青年たちが毛主席のさだめた農業の「八字憲法」（土——土壌の改良、肥——肥料、水——水利、種——良種、密——密植、保——作物の保護と病虫害の防除、工——工具の改良、管——耕地の管理）をもとに生産上の問題点を点検するのを助けた。青年たちが毛沢東思想を運用して科学実験をすすめるなかでの問題についてもいろいろと助言した。青年たちは心から老貧農に敬服した。

まきつけの時、青年たちは肥料をしらべてもらうために、「参謀」の老人をまねいた。老人は肥料を手にとってみながら、

「こりゃあだめじゃよ、まだ発酵しておらん。これをまいてからタネをまきつけると、肥料が発酵するときに温度があがって、苗は死んでしまう」と注意をあたえた。青年たちはもっともだと思い、すぐに肥料をとりかえた。

やがて、小麦に水をやって凍らせ、冬越しさせる時がきた。夜が明けるのを待って青年たちは「参謀」の老人のもとに教えを乞いにいった。

「ゆうべはお月さんがかさをさしておったから、天気が変わるじやろう。いま水をやると、

それが凍って土がさけ、麦の根をちぎるから、苗は死んでしまう」と老人は言った。

はたして老人の予想どおり、昼ごろから骨を刺す西北風が吹きつづいた。

一九六八年の初夏、小麦の穂が出るころだった。とつぜん葉が黄ばんだ。原因をつきとめるには、土壌にふくまれる水分の量をしらべなければならぬ。

青年たちはそれに必要な測定器を買いたいと言いつ出した。それには百元あまりの金がいる。老貧農たちはわが子をさとすように青年たちに言った。

「毛主席は自力更生の道を示しておられる。わしらは勤儉をむねとして仕事をしなければならぬ」

そこで、青年たちといっしょになってあれこれと工夫をこらした。しめった土をとってきて秤にかけ、それから火にかけてナベのなかでかわかしてからまたはかかってみる。前の重さから後の重さをひいた残りが水分の含有量なのである。こうして小麦の葉が黄ばんだ原因をつかみ、すかさず対策を講じたので、小麦は数日のうちにみどりを取りもどした。

貧農・下層中農に教えられながら、科学実験小組の青年たちは数々の困難をのりこえ、ついに小麦の五百キロ突破の記録をうち立てた。

小麦の取り入れがすむと、トウモロコシをまきつけ、きびしい努力をかさねて秋にはこれまた五百キロの関所を突破した。

「失敗や成功をつうじて、知識分子は労働大衆と結びつかなければ何ごともできない、という毛主席の教えの偉大さがほんとうにわかってきました。ぼくたちは、農村というこの広びろとした天地にきてはじめて、自分たちの知識が多いどころかむしろにすくなすぎることをさとりました。やる気さえあれば、腕をふるうところには不足しません。農村こそ大いに力を発揮できる場所なんです」と周進安さんは体験をかみしめるように語った。

いま、この公社には百二十余名の知識青年と貧農・下層中農からなる二十五の科学実験小組がある。

数年らい、かれらは小麦、サツマイモ、トウモロコシ、綿花などの増産実験をすすめ、つみあげた有効な経験を広大な耕地に應用して、大幅の増産をあげている。

「広闊天地大有作為人民公社」で十日間の取材を終えて帰途につくとき、この公社のすばらしい名についていっそう理解がふかまったように感じた。

こんにち、中国にあるいく万という人民公社はみな、広びろとした天地となっている。どの

人民公社を訪ねても、毛沢東思想の輝きのもとで、めざましく成長する多くの知識青年の姿がみられるのだ。

生涯労働者と結びつく

潘 玉 銘^①

一九六八年に、われわれの偉大な指導者毛主席は、一連のきわめて重要な最新指示を発表した。なかでも、これまでの学校を出た技術員のわたしがとりわけ身にしみ、かぎりない励ましをえたのは、知識分子にたいしては労働者、農民、兵士による再教育をおこなわなければならない、という指示だった。これまでの七年あまり、わたしは、知識青年は「どうしても広範な労働大衆と結びつかなければならない」という毛主席の教えにしたがい、労働者と起居、食事、労働をともにし、たえず自分のふるい思想、ふるい習慣を一掃するのにつとめた。そして労働者と一体になって二十項目あまりの技術革新をおこなった。なかでも超小型検波器用マグネットはアメリカ製のものをしてのいでいる。

「潘さん、あなたがえらんだ道は正しい。いつまでもその道を歩みつづけるのだ」と労働者の同志たちは親しみをこめていつてくれた。

労働者と結びつくうえで、わたしは形式的な結びつきから、しだいに思想的にも感情的にも変わってゆき、やがて自分のほうからすすんで労働者階級に再教育してもらうようになり、労働者から養分と知恵をくみとり、かれらとともにがんばり、大いに技術革新をすすめるという深化の道をたどってきた。そこにははげしい二つの路線の闘争があった。わたしが前進する途上でおさめたどの成績も、労働者の教えと助けをうけながら、たえまなく修正主義思想の侵食にうち勝った結果なのだ。

一九六一年、大学を出たわたしは西安石油計器工場に配属され、技術員になった。そのころ工場では、二つの路線の闘争がはげしくたたかわれていた。党内ひとにぎりの資本主義の道であゆむ実権派とブルジョア階級の反動的技術「権威者」は、大裏切り者劉少奇の「専門家による工場支配」というばかげた論調をしきりに宣伝していた。そして、労働を軽視し、労働者を軽視し、名利や地位を追求するブルジョア思想をわれわれにそそぎこんだ。「技術者は口をうごかし、労働者は手をうごかせ」だの、「発明や創造をしたければ、もっと本を読め」だのとほざいたのもかれらだ。そうした毒にあたって、これまでの学校で教育をうけた多くの技術員は、一日じゅう部屋のなかにとじこもって洋書にかじりつき、資料あさりやデータさがしをし

て、実際から離れたいわゆる「試験」ばかりやっていたのだ。

こうした修正主義の科学研究路線に、わたしもむしばまれていた。工場に入ると、国家の規定にもとづき、わたしはまず職場に労働者として身をおいた。職場にはいったものの、腹のなかでは個人主義的なそろばんをはじいていた。一年間労働したという「合格証」をもらえば、事務室にすわって技術員になれるのだ、というわけである。その一年が過ぎた。しかし、わたしはあいかわらず職場に残されて労働をつづけた。いつも倉庫の整理やゴミ捨てなどで油まみれ、ほこりまみれになるので、個人主義的な考えが頭をもたげてきた。「十何年も学校で学んだのだから、自分の方が労働者よりも『すぐれている』。こんな仕事をしていては、なんのために大学を出たのか意味がない」などと考えるのだ。そうしたわたしの考え方をとらえて労働者の同志は、いくどもわたしのところに来て話をしてくれた。

「労働者よりも自分の方が『すぐれている』と考えるのはどんな人間だか知っているかね。それはブルジョア階級なんだ！労働者をみさげろ知識分子は、われわれ労働者からみさげられてるんだ。われわれといっしょになってやってゆく知識分子なら、われわれは心から歓迎するんだ」とはっきりいってくれた。

労働者の同志のことばは、その一言一句がわたしの思想上の「できもの」にふれた。わたしを学校にやってくれたのはビルを建設する労働者であり、穀物をつくる農民なのだ。それなのに、すこしばかり本からの知識を身につけたからといって、労働者、農民をみさげ、かれらといっしょに働きたがらない。こうした考え方こそ、労働を軽視し、労働者と農民を軽視するブルジョア思想でなくてなにか、とわたしは考えた。労働者と腹をわって話しあっているうちに、われわれの工場の労働者は自分たちの知恵と力にたよって、自力更生、刻苦奮闘の精神で多くの設備をつくりあげたばかりでなく、数々の新製品づくりにも成功していることがわかった。走資派や反動的技術「権威者」たちのなかには、何年もの時間と百余万円もの公金を使って新しい技術の開発とやらを大いに吹聴した者がいた。しかし、検定の結果、できあがった計器の水準は一九三〇年代に学校で使われていた実験用の計器の程度でしかなかった。こうしたままなまましい事実から、ほんとうに知識をそなえているのは、労働者より「すぐれている」と自認する知識分子ではなくて、階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命のなかで実践の経験をつんだ労働者大衆だとわたしはさとった。知識分子はかれらと結びついてこそ、はじめてなにかをなすことができるのだ。

思想上のわだかまりが解けたので、技術員として事務室にすわる身分になりたいという気がなくなつて、まじめに職場での労働にくわり、感情的にもしだいに労働者に近づいていった。もっぱら公のために我を忘れて働く、労働者階級のとうとい品性にわたしは感化された。大胆に考え、大胆にやっける労働者階級の創造精神にわたしは感化された。こうして、わたしは私心や雑念の束縛から、書物や「権威者」を盲信する考え方から、しだいにとき放されていった。

一九六五年、われわれの小組は新製品づくりの任務をうけとった。それは超小型検波器用マグネットをつくる仕事だった。仕事はきわめて困難だったが、労働者たちは自信にみちてこういった。

「いぜん、フルシチョフは石油調査につかう計器をわれわれに供給しようと思わずにわれわれの首をしめあげようと夢みたのだ。われわれは、毛主席の『自力更生』の道をあくまでつきすみ、ついに『中国製』のものをつくりあげた。われわれは普通の大きな検波器をつくれるだけではなくて、こんどは体積のちいさい、高性能の超小型検波器をつくらなければならない。その心臓はマグネットだ。国の榮譽のために、毛主席のためにがんばって、どんなことがあつ

でもそれをつくってみせる！」

こうした労働者の雄大な志にはげまされて、この仕事を受け持つわれわれ数名の者は、国の榮譽のために、帝国主義や修正主義、反動派とたたかう強い決意をもって、昼間は生産に従事し、夜間や休日を利用して試作に取り組んだ。最初、わたしの頭には「できあいのもので間にあわせる」という考え方があった。資料がないので、わたしは工場にいるある技術者のところへいった。政治的に反動的な立場にたっていたその男は、わざと一九三二年に作成された英文の資料をもち出して愚弄しにかかった。わたしはすっかり腹をたてて帰ってきた。そのご、わざわざ北京のある研究所に学びにいった。そのブルジョア階級の旦那は二十五分間しか參觀を許さないうえ、「これはきみたちの研究するものではない！」などといって鼻であしらった。二度ともカベにぶつかって、わたしは気を落としかけた。そのとき、労働者の同志がまごころをこめて援助の手をさしのべてくれたのだ。

「毛主席は『社会の富は、労働者、農民、勤労知識分子がみずから創造したものである』とわれわれに教えている。書物や『権威者』を盲信し、労働者階級の知恵に目もくれないあんたのふるい思想がカベにぶつかったのはいいことだ。ブルジョア階級の旦那どもは洋書をどれだけ

読んだにせよ、実際にはどれほどの実力も持っていないのだ。あの連中にできるのはアメリカ帝国主義、ソ連修正主義のうしろを這いずってゆくことだけなんだ」

このことばに、わたしは労働者といっしょになって革新をすすめる決意をいっそう固めた。資材がないと、労働者といっしょに廃品のなかからさがした。資材がないと、労働者といっしょに実際の仕事のなかで探究し経験をつんだ。マグネットの鑄造には高温に耐える鑄型が必要だった。それをつくるために、われわれはいくども試みをつづけた。しかし、鑄型は高温にまけて軟化、変形してしまうのだった。それをみて、農村出のある労働者が、鑄型づくりの原料のなかにある種の耐火材料をくわえた。これで、鑄型づくり成功した。つきにぶつかったのはマグネットの指向性と変形、技術設備上のいくつかの難関だが、これもつきつきに突破した。試作のヤマにかかると、組の労働者はみな、休み時間にも休まず、積極的にたたかいてくわわった。一千度をこえる高温炉のかたわらで仕事をしていたある労働者は火傷を負い、手の指をおしつぶしたが、それでも持ち場を離れなかった。試作をくりかえし、失敗をかさねて、ついにアメリカ帝国主義、ソ連修正主義をはるかにしのぐものをつくりあげた。われわれの工場から新製品が続々と石油調査の現場へおくり出されるのを見て、祖国のためにより多くの石

油が発見されるであろうことを想像するとき、広はんな労働者と同じようにわたしはいい知れない仕合わせと誇りを感じるのだった。

その他のさまざまな技術革新も、すべて労働者の助けをうけて成功したものだ。わたしは事実から深く教えられた。いぜんわたしは、たくさん本を読んだのだから労働者よりも有能だとばかり考えていた。だが実際には、よくものを知っているのはやはり労働者であって、わたし自身のほうがなまはんかの知識しかなく、こっけいなほど幼稚だった。いぜんわたしは科学試験にいつも私心と雑念をまじえていた。これでひとつ自分の腕のあるところをみせて、技術上の指揮権をにぎろうという考えがつきまよっていたのだ。労働者はひたすら革命のためを考え、個人の名利など眼中におかない。そうした気高い品性にくらべると、わたしははずかしさで顔がほてるのだった。いらい、知識分子の優越感や、自分が正しいのだというふい考え方がしだいに薄れ、謙虚な気持ちで労働者階級に学ぼうという自覚がつよまっていた。

毛主席はつぎのように指摘している。「知識分子が、まだ大衆の革命闘争と一体にならず、まだ大衆の利益に奉仕し大衆とむすびつく決意をかためないうちは、とかく主観主義と個人主

義の傾向をおび、かれらの思想はとかく空虚で行動もとかく動揺的である。」「知識分子のこのような欠点は、長期の大衆闘争のなかでなければ克服できない。」

この毛主席の偉大な教えは、知識分子のもつ最大の弱点を指摘し、知識分子に思想改造のための根本的な道をさし示している。知識分子の思想が空虚で行動が動揺的なのはなぜか。そのもっとも主な原因は「私心」が多く、実践の経験がすくないことにある。労働者階級の思想がもっとも革命的で行動がもっとも確固としているのはなぜか。そのもっとも根本的な原因は「公」のためにということ念頭に置き、実践の経験に富んでいることにある。七年あまりこのかた、わたしはつぎのことをはっきりとつかんだ。

労働者階級はわたじのものともよき先生だ。労働者と結びついてはじめて、二つの路線の闘争のなかで、自分の頭のなかにあるさまざまなブルジョア思想をたえずとりのぞき、毛主席にかぎりなく忠誠をつくす赤い心をきたえあげることができる。また、書物のワクをつきやぶり、修正主義の科学研究路線のクサリをたちきって、たえず労働者の知恵と経験をくみとって自分をゆたかにし、理論と実践とをしっかりと結びつけ、そうすることによって仕事の面での創造をおこない、前進してゆくことができるのである、と。

わたしは労働者と結びつくという面ですこしばかり成績をあげたけれども、党と毛主席の要求にくらべると、ひじょうに大きなへだたりがある。労働者大衆がわたしによせている期待にくらべてもまだまだ大きなへだたりがある。政治を先行させる点に欠け、すこしばかり成績をあげればおごり高ぶるといった欠点がつねにあらわれる。とくに、一九六八年の六月に、工場の生産を指揮する責任をもつようになってから、わたしの肩にかかる重荷は増し、仕事もいっそう忙しくなった。こうした状況のもとで、つねに労働に参加するかどうか。ひきつづき労働者と一体になってゆくかどうか。これがわたしへの新たな試練となった。労働者の同志は深い感情をこめて、こういつてくれた。「あなたは職務が変わっても、ぜったいにわれわれのことは忘れないでくれ」

短いこのことばには、つよい期待ときびしい要求が秘められている。たとえ受け持つ仕事は変わっても労働者と結びつく道を変えてはならない。わたしは、自分に再教育をほどこしてくれる労働者の同志のことをけっして忘れない。それを忘れるなら、思想的にゆきづまる。わたしは、生産労働からぜったいに離れない。もし離れるなら、邪道にふみこむことになる。わたしは、毛主席の教えをあくまで守り、毛主席著作の活学活用にいっそうつとめて、いつまでも

労働者と結びつき、生涯、労働者階級の小学生として革命をおこなうつもりである。

注

① 筆者は西安市石油計器工場の技術員。

農村での十年間

邢燕子^①

さいきん、わたしたちの偉大な指導者毛主席はつぎの最新指示をいただきました。「大学はやはり必要である。ここでわたしがおもに言っているのは、理工科系の大学はこれからも必要だということである。しかし、修業年限は短縮し、教育は革命をおこない、プロレタリア階級の政治で統帥し、上海工作機械工場のように労働者のなかから技術者を養成する道を歩まなければならぬ。学生は、実践の経験のある労働者、農民のなかから選抜し、学校でなん年か学んだあと、ふたたび生産の実践のなかへもどるようにしなければならない。」わたしは、毛主席のこの偉大な指示がこのうえもなく英明で、正しいものであると深く感じました。

一九五八年、全国人民は意気どみにみちあふれ、闘志満々と総路線、大躍進、人民公社という三つの赤旗を高くかかげて、社会主義の大道を勇往邁進していました。こうしたすばらしい情勢のもとで、わたしは偉大な指導者毛主席の呼びかけにこたえて、労働者、農民と結びつく

革命の征途につきました。一九五八年に農村にきてからこんにちまでまる十年の歳月が流れました。わたしはこの十年間の階級闘争と生産闘争の実践のなかでできたえられ、向上したのです。毛沢東思想の輝く光にはぐくまれたわたしは、たえず成長をとげました。わたしたちの偉大な指導者毛主席は前後三回にわたってわたしを接見しました。これはわたしにたいする最大の関心、最大の信頼、最大の激励、最大の鞭たつです。

農村は広びろとした天地

偉大な指導者毛主席はわたしたちに、「農村にいて活動できるこうしたすべての知識分子は、みなよろこんでそこへいくべきである。農村は広びろとした天地であり、そこでは大いに力を発揮することができる」と教えています。わたしは毛主席のこの教えにしたがって、ブルジョア階級の「私」を大いにうち破り、プロレタリア階級の「公」を大いにうち立て、そして農村に住みついたのです。

農村にきてまもないころ、うちつつくひどい水害に出会いました。階級敵はこれにつけこんで、農村をはなれて都市へゆくよう青年たちをあおりたてていました。「邢燕子なんか、あれ

は農村に長くいるはずはないよ」とかれらはいった。

「ねえ、燕子さん、ご両親がそろって大都市にいるのに、あなたは学校にもあがらず、仕事にもつかず、わざわざ農村にやってくる毎日ドロまみれになってどうするの。ほんとうにばかねえ、燕子さんは」と善意のおばあさんたちもわたしにこう言うのでした。

からだじゅうドロだらけになり、手には血まめができています。これを見て、わたしは自分ながら農村に来るべきでなかったと後悔しました。都市にかえるか、農村にとどまるか——わたしはげいしい思想闘争をくりかえしました。

「きょう、労働大衆と結びつけば、きょうは革命的であるが、もしあす結びつかなくなるか、あるいは逆に民衆を抑圧するなら、それは非革命的か、あるいは反革命的である。」わたしは毛主席のこの教えをくりかえし学習し、労働者、農民と結びつく道を歩むことを堅持できるかどうかは、自分にたいするきびしい試練であり、厳粛な階級闘争であると深くさとりました。農村に住みつくことこそ毛主席の偉大な教えを実行することであるとわたしは考えました。階級敵はわたしが農村に長くいることはないと言っているが、わたしはかならず一生涯農民になり、農村に根をおろさなければならぬ。毛沢東思想で武装した青年は気骨が

あり、どんな困難をも恐れませんが。

では、どうやって困難にうち勝つか。わたしは広はんな貧農・下層中農とともに全国に名を知られた労働模範王国藩の勤儉創業・刻苦奮闘の精神をくりかえし学習し、生産によって困難にうち勝つことを決意しました。わたしは何人かの婦人といっしょになって漁撈隊をつくりました。「ご婦人が魚をとるだつて、魚もびっくりしてみな逃げてしまうよ」とわたしたちをみさげていた連中はこう言うのでした。

しかし、それもわたしたちの決意を動揺させることができませんでした。厳寒の冬に魚をとることは、たしかに苦しい。雪まじりの骨にしみとおるような寒い風が顔にあたると、針にさされたように痛む。氷の上に立つ両足はかじかむ。網のツナは水から引きあげられるとたちまち凍ってしまい、手でそれをつかもうものなら、一つにくっついてしまう。こんな寒さのなかを毎日朝から晩まで十何時間も働いたのです。このように一冬の奮戦のおかげで、わたしたちは生産大隊のために三千余元の収入をおさめました。これによって公社員の生活問題を解決しただけでなく、婦人を見さげる例の連中をも教育しました。苦しい生活における練磨は、わたしの頭のなかにあったブルジョア階級の汚れを洗いおとし、貧農・下層中農にたいするプロレ

タリア階級の感情をつよめたのです。

自然界にいどむたたかいのなかでは、力にたよるだけではだめで、頭をはたらかさなければなりません。わたしたちは、いままままきつけはできても収穫のあがらないアルカリ低地帯で土壌改良と科学実験をおこなった結果、ついに豊作をかちとりました。このほかに、わたしたちはまた、青年、老農、幹部の三結合による科学実験小組をつくって先進的な経験を宣伝し、優良品種をおしひろめたりして、一步おきに苗を三本植えつけないうこれまでのふるいワクをうちやぶって、合理的な密植をおこないました。トウモロコシとコウリヤンがオケラの脅威にさらされているのを発見すると、さっそく調査研究をおこない、老農に教えを乞い、殺虫剤をつくって害虫を殺し、りっぱな効果をあげました。こうして、たえまない実践をつうじて、わたしたち若い人たちはいろいろと農業の科学・技術をおいおい身につけるようになりました。

広はんな貧農・下層中農とわたしたちの奮戦によって、人びとから永遠に良田になれないといわれてきたこのあたりの窪地——北大洼も、いまでは穀倉地帯に変わりました。貧農・下層中農は、「これらの娘さんたちはみんなすばらしい働き手だ」といって、わたしたちをほめて

います。わたしはまた、貧農・下層中農、広はんな青年とともに、天をも恐れず地をも恐れず、無敵の毛沢東思想にたよって川を掘り、堤防をつくり、わずか二年の時間で荒地を三百余ムー開墾し、その後の連年の豊作のために有利な条件をととのえました。

「人は思想をかえ、土地は装いをかえた。北大洼の窪地もいまではすっかり面目を一新した。昔は見渡すかぎりの水、いまはどこもかしこも稲のかおりがただよう」といって、広はんな貧農・下層中農はよろこんでいます。農村はほんとうに広びろとした天地で、いっそう美しい未来がわたしたちに手招きをしているのです。

階級闘争のつばできたえる

労働者、農民と結びつく道をふみだしたばかりのところ、わたしには、自分は貧農家庭の出身だから階級的自覚が高いということは言うまでもないという間違った考えをもっていました。そのため、わたしはいちらずに他人の思想を改造することを考えて、自分自身を改造する心構えに欠けていました。だが、階級闘争の現実是我はわたしに深刻な教育をあたえました。

農村にいったばかりのころ、広はんな貧農・下層中農は村における階級闘争の歴史をわたし

に話してくれました。土地改革のとき、階級敵は、「すかんびんども、お前たちはおれの家屋や土地を分けようとするが、いつかその日がくれば、そっくりそのまま返さなけりゃ許さんぞ！」と貧農・下層中農をおどかしたのです。農業協同化運動のときには、階級敵は、「みんなが同じ土地で生まれ、同じ土地で育ち、同じ土地で耕し、同じ生産隊で食糧を分けているのだから、貧困なものも裕福なものも同じ家族のものだ」とわめきたてました。そして、人民公社化のあと、階級敵はまたもや、「人民公社はむちゃくちゃだ」などといって攻撃したのです。こうした事実は何れもこれもわたしに生きいきとした階級教育をしてくれました。広はんな貧農・下層中農は階級敵の威嚇におどしあげられたり、階級敵の反革命的仮象にまどわされたりすることもなく、また階級敵の金銭の誘惑にも動かされませんでした。階級敵の陰謀術策はつきつきとあばかれてしまいました。わたしは、貧農・下層中農こそ階級と階級闘争をもっとも理解し、革命をもっとも理解しており、かれらこそわたしの見ならうべきりっぱな手本だということ深く体得しました。

階級闘争と二つの路線の闘争についての自覚をかめるため、わたしはつねづねおじいさんに昔の苦しみを話してもらったり、旧社会で苦しみをなめつくした老貧農に家の歴史や村の歴

史を話してもらったりしました。わたしはまた、貧農の謝おばあさんに見ならうためその家に引っこしました。謝おばあさんは小さいときから地主の召使になって働いたが、その後、乞食になり、十八年間も流浪の生活をしました。極悪の旧社会はかの女の三人の子どもの生命をうばいさりました。ですから、謝おばあさんの苦しい思い出話を聞くと、わたしの階級的自覚は一步一步とたかまり、階級敵にたいする憎しみもいっそうはげしくなり、貧農・下層中農にたいするプロレタリア階級の感情がさらにふかまっていくのでした。

階級闘争の最前線で試練をうけ、階級闘争のあらしなかで自分をきたえることは、知識青年にとってこのうえもなく重要な課題です。農村に住みついてから、わたしは階級敵から目の上のごぶとみなされてきました。わが国が連続三年にわたる自然災害にみまわれ、内外の階級敵が反中国の波らんをまきおこしたとき、ある地主分子は反攻、報復をくわだて、わたしをおとしいれようとしてました。こうした階級敵の気がいじみた反攻と威嚇を前にして、わたしは、「すべて反動的なものは、たおさないかぎり、たおれはしない」という毛主席の教えを心にきざみ、貧農・下層中農とともに、この反動的なやつと断固たる闘争をおこない、かれにたいし大衆による独裁を実行しました。この出来ごとによって、わたしは、労働者、農民と結び

つく過程において知識分子は階級闘争の腕前を身につけ、階級闘争のあらしを突いて前進しなければならぬと、ひとしお理解するようになりました。

死を賭して毛主席の革命路線をまもりぬく

一九六四年、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇は毛主席の革命路線を破壊し、山地や農村にゆく知識青年の隊列をいちだんと瓦解させるため、その黒いうでぎきの手下周揚を二回もわたしたちの村に派遣して毒をばらまきました。周揚は毛主席著作の学習や人民に奉仕することには一言もふれず、黒い『修養』のなかのブルジョア処世術をさかんにまくし立てました。かれは百方手をつくして、名をあげ一家をなすために奮闘するよう、わたしをばげまし、わたしを修正主義の横道に引きずりこもうとしました。だが、かれらの悪たくみは永遠に実現できません。

同じくこの年、わたしたちの偉大な指導者毛主席はわたしを接見したとき、ふたたびわたしに前進する方向をさし示してくださいました。わたしは断固として毛主席の革命路線にそって前進したのです。

偉大なプロレタリア文化大革命がはじまってから、いく億もの軍民は裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇をあげだし、うち倒しました。これによって、わたしはこの資本主義復活の元凶の反革命的正体をいちだんとはっきり見ぬきました。わたしは広はんな貧農・下層中農とともに、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇の代理人に猛攻撃をかけ、かれらにたいして造反し、かれらの権力をうばいとりました。わたしたちは、かれらのばらまいた毒素をさらに一掃するため、裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇の鼓吹した「階級闘争消失」論、「三自一包」、「四大自由」②、「物質的刺激」、「立身出世」などの反革命修正主義の黒いしろものについて、深くつつこんだ、持続的な革命的大批判をくりひろげ、つきつきと勝利をおさめました。

毛主席をまもり、毛沢東思想をまもり、毛主席の革命路線をまもるために、わたしはだんこ広はんな貧農・下層中農とかく団結してともにたたかい、階級敵にたいして断固たる闘争をくりひろげました。

ある日、公社で大裏切り者劉少奇批判の大会がひらかれました。当時、わたしは腰が痛くてオンドルから降りることさえできませんでしたが、それでもやはり大会に参加すると決意しました。公社がわたしたちの村から十キロもはなれているので、貧農・下層中農はみな、いかなようにとわたしにすすめました。「労働者階級の奸賊劉少奇を批判する大会ですから、わたしは這ってでもゆきます」とわたしはこたえました。わたしは歯をくいしばり腰の痛みをこらえ、「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかいろう」という毛主席の教えを暗唱しながら、時間通りに会場にたどりつき、劉少奇とその代理人が資本主義を復活させようとした極悪非道な犯罪行為を大会で摘発し、批判しました。

毛主席の革命路線を断固つらぬくため、わたしはまた、村に定住した知識青年たちを結集して階級敵とたたかいました。プロレタリア文化大革命のなかで、階級敵が村に住みついている多くの知識青年を都市にかえるようそのかしていたとき、わたしは知識青年とともに毛主席の最新指示を学習し、知識分子は労働者、農民と結びつくべきであるという毛主席の教えを学習し、いっしょに私心とたたかい修正主義を批判し、腹を割って話しあい、逆風をつき、荒浪とたたかいました。その結果、階級敵の犯罪的な陰謀は粉碎されました。

「農村こそわれわれの戦闘の持ち場だ！」とみなが断固としていうのでした。

いつまでも大衆とともに

わたしが省、専区、県の各級革命委員会の委員や常務委員になってから、大衆はますますわたしを称賛するようになりました。大衆の称賛はわたしにたいする最大の信頼と鞭たつて、こうしたときこそ、いよいよ謙虚になって大衆の意見に耳をかたむけ、ことあるごとに大衆と相談すべきであって、けっして独りよがりになってはならない、とわたしは思いました。大衆とかく結びつくこと、これは一般的な作風の問題ではなくて、どのような道を歩み、どのような旗をかかげるかの大问题であり、自分をプロレタリア革命事業の継承者に養成することができるかどうかにかかわることであり、新しく生まれた革命委員会を強固にすることができかどうかの大きな問題です。毛主席と党がわたしを養成し、貧農・下層中農がわたしを信頼し、わたしに事をなす権限をあたえてくれた以上、わたしはいっそうよく人民に奉仕すべきであって、けっして劉少奇のいったように、幹部になると「すべて」をもち、役人風や旦那風を吹くということになってはいけません。ですから、わたしは、思想的には少しも特殊な考えをもつてはならず、生活の面ではちょっとした特殊な要求でもあつてはならないと自分を律していま

す。

生産大隊で革命的指導部ができたあと、わたしは、プロレタリア文化大革命のなかで立場を誤った同志が会議のときには発言をせず、ふだん顔をあわせたときにも物をいわないのを発見しました。わたしは、こうした同志はみな自分の階級的兄弟で、運動のなかで立場を誤ったのは、劉少奇のブルジョア反動路線のワナにかかったためで、自分はかれらを援助しかれらと團結してともに毛主席の革命路線をまもりぬくためにたたかう責任がある、と考えました。

そこで、わたしは自分からすすんで、自分にいちばん多く意見をもち、自分を批判した大字報をいちばん多く張った貧農・下層中農の家ににかけていって、かれらの意見をもとめ、かれらとともに毛主席の最新指示を学習し、いっしょに解放前の苦しみを思いおこし、こんにちの仕合わせをかみしめました。こうして、わたしとかれらは心がかうようようになりました。

「いままでわたしは敵にだまされて、あなたを責めたが、ほんとうにすまなかつた」と貧農の焦長江さんが興奮していうのでした。

「わたしたちはみな同じつるにみのつたウリですよ。劉少奇こそわたしたちの第一の敵です。どんなことにつけてもこの劉少奇を憎むべきです」とわたしはこたえました。

幹部になってから、会議にすることが多くなりました。だが、いかに会議が多くても、わたしはなんとかして時間をみつけたしては公社員たちとともに労働し、かれらとともに私心とたたかい修正主義を批判しました。そして、わたしはすすんでもっとも骨の折れる仕事をし、もっとも苦しい仕事をうけました。

ある日、会議からかえってきたばかりのとき、公社員たちが用水路を掘るのに大童おおわらわだということを書きました。わたしは、さっそく十何キロもひた走りに走って、工事現場にかけつけ、公社員たちとともにドロをはこんだり排水をしたりしました。初春のこととて水はまだとてもつめたい。だが、大衆といっしょに働くわたしは、心が暖かいのです。

ことし、小麦のまきつけのとき、齒の痛みで二日間も食事をとれなかったわたしに、公社員たちは休むようにといってくれましたが、わたしは毛主席の「われわれは片時も大衆から浮きあがってはならない」という教えを思いだし、ずっと仕舞いまで働きとおしました。「わたしたちの燕子さんとわたしたちは心がいっそう緊密にかよっているわい」と広はん貧農・下層中農が口をそろえていうのでした。

十年このかた、わたしは労働者、農民と結びつく大道である距離をすすんできましたが、今

後のみちのりはまだまだ遠いのです。わたしはかならず毛主席の教えを心に深くきざみつけ、毛主席の著作をまじめに活学活用して、たえず階級闘争と二つの路線の闘争の自覚をたかめ、大衆と密接に結びつくという党の光榮ある伝統を発揚し、労働大衆と結びつく道にそって休むことなく永遠に前進する決意です。

注

① 筆者は河北省宝坻県司家莊生産大隊に住みついた知識青年。

② 「三百一包」とは、自留地を多くのこし、自由市場をふやし、損益にみずから責任を負う企業を多くし、農業生産の任務を戸ごとに請け負わせることである。「四大自由」とは、高利貸の自由、雇用の自由、土地売買の自由、経営の自由のことである。

毛沢東思想にはぐくまれた新しい型の農民

——社会主義新農村の建設にうちこむ大学生顧成祥さんの事績

『人民日報』通信員

毛主席はわれわれに、「ふるい型の学校で養成された学生は、多数あるいは大多数が労働者、農民、兵士と結びつくことができるのであり、一部の人は発明や創造もおこなっている。だが、正しい路線の指導のもとで、労働者、農民、兵士から再教育をうけ、ふるい思想を徹底的に変えなければならない。こうした知識分子を、労働者、農民、兵士は歓迎するのである」と教えている。江蘇省宿遷県耿車人民公社陸荘生産隊の顧成祥さんは、貧農・下層中農からたいへん歓迎されている大学生である。

毛主席のさし示した革命の道をつきすすむ

党の教育のもとで、顧成祥さんは、社会主義新農村の建設を自分の理想とし、祖国初代の新

しい型の農民になろうと志している。顧さんは小学校時代から大学時代までいつでも労働を忘れたことがなく、夏休みや冬休みになるたびに郷里にかえって貧農・下層中農といっしょに野良仕事をした。長い間にわたる鍛練をへて、かれはいろいろな農芸を身につけたうえ、貧農・下層中農への階級の感情もつちかわれた。

一九六三年の夏休み、江蘇省師範学院から家へかえったとき、郷里のありさまを目にしたかれは、はげしい憤りをおぼえた。当時は、大裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇が江蘇省と宿遷県におけるその代理人をつうじて近隣の三樹人民公社で試験的に「包産到戸」(農業生産の任務を一戸ごとに請け負わせること＝訳注)をやっていたときで、このよこしまな風が陸莊生産隊にまで吹きまくり、その結果、多くの集団耕地が自留地として分けられてしまい、新しく掘った用水路の岸辺の土地もばらばらに掘られ、集団生産がひどい破壊をこうむった。郷里の貧農・下層中農が「三自一包」(本書の「農村での十年間」の注②を参照)の災いの渦に巻き込まれ、ふたたび解放前の苦しみをなめようとしているのをみて、かれは心をいためた。

学校にもどると、卒業実習がはじまった。同級生たちは卒業の分配の話で持ちきりだった。

あるものは国家による分配にしたがうといったが、あるものは裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇のとなえた「進学出世論」の害毒をうけて、農民になりたがらず、とりわけ苦しい農村へ行きたがらなかった。これを見て、顧さんは怒りをこみあげた。かれはこの問題について毛主席の著作を学習した。「わが国はいまなおひじょうに貧しい国で、短期間ではこの状態を根本的にあらためることができず、すべては青年と全人民が数十年にわたって、團結して奮闘し、自分たちの両手で富強な国をつくりあげることにかかっているということ」である。農業は国民経済の基礎であり、自分が大学生になれたのもひとえに党と人民が自分を養成した結果であって、恩しらずに貧農・下層中農から浮きあがってはならず、農村にかえって貧農・下層中農とともに社会主義新農村の建設に力をつくさなければならぬ、と顧成祥さんは思った。

かれは、農村にいて、貧しくて立ちおくれた郷里の様相を変えるために力をつくしたいと当時の学院に熱情をこめた手紙をしたためた。ところが、意外にも学院のほうはかれの革命的な要求を「正道はずれ」なのだともなし、かれが労働者、農民と結びつく道をすすむのを許さなかった。どうしたらよいか、と顧さんはしばらくのあいだためらった。ある日、犠牲になった

烈士を吊うために、かれは学友といっしょに蘇州の郊外にある烈士陵园を訪れた。かれは烈士陵园の陳列館で一人の烈士の遺書をみた。この年若い烈士は母親に知らせず、革命の部隊におもむき、革命のために勇敢にたたかい、自分の命をささげたのである。これにすっかり感激した顧さんは烈士の写真の前で目に熱涙を浮かべながら、「何千何万の革命戦士は、人民の利益のため、われわれに先だって英雄的に命をささげたのである。われわれはかれらの旗を高々とかけ、かれらの血の跡をふんで前進しよう！」という毛主席の偉大な教えを暗唱した。かれは毛主席のさし示した革命の道をすすみ、郷里にかえって普通の農民になるよう決意をかためた。

すすんで貧農・下層中農から再教育をうける

陸荘生産隊にもどった最初の日に、顧さんはさっそく髪を短く刈り、学生服を脱ぎ捨て、はだして貧農・下層中農とともに野良仕事をした。ところが、顧さんの行動を理解しない者は、「成程はほんとうにばかものだ。町で楽な暮らしができるのに田舎にかえって農民になるなんて」といった。とくに、当時の江蘇省師範学院がなん回もかれに手紙をおくって、学校にか

えらなければ、共産主義青年団から除名するとかれをおどした。こうした脅迫については、顧さんは早くから覚悟していた。かれはふたたび、知識分子はかならず労働者、農民と結びつかなければならぬという毛主席の偉大な教えを学習し、自分の行動でうわ言をはねかえした。

顧さんの革命的行動は生産大隊党支部書記李俊章さんの力づよい支持をえた。李さんは熱情をこめて顧さんにいった。

「きみはいまこそ村にかえってはいるが、小さいときには苦勞を知らずにそだったんだし、それに、学校でなん年間も修正主義教育をうけてきたんだから、貧農・下層中農とは遠くかけはなれている。いま、貧農・下層中農と結びつくには、何よりもまず、自分の思想の面で革命をおこなわなければならない」

かれは、年老いた支部書記のねんごろなことばを心に深くききみつけた。かれは自分を徹底的に改造する願望をいだいて、なにごとにつけても貧農・下層中農から再教育をうけ、すすんで世界観を改造していった。かれは牛小屋に泊まりこみ、夜は石油ランプの下で貧農・下層中農とともに毛主席の著作を学習したり、心をうちあけて話しあったりして、かれらから再教育

をうけた。昼間は貧農・下層中農を師とあおいでもっとも重い、もっともきたない野良仕事をした。

ある日、どしゃぶりの雨でイモの苗畑が水びたしになった。かれは貧農・下層中農とともに大雨のなかを畑にやってきて排水をし、昼夜をわかたず洪水とたたかっついにイモの苗畑をまもりぬいた。

きびしい日でのときには、かれは連続的にたたかう革命的精神を発揮して、一日に水を百荷もかついだ。集団生産をりっぱにやるために、かれは疲れをもとせせず、毎日あけ方から夕方まで働いた。

顧さんは貧農・下層中農を手本とし、まじめにかれらに学んだので、大きな成績をあげた。公社員たちのかれにたいする見方も変わり、

「成祥はほんとうに農民になった」とかれらはいった。

みんなからほめられるなかで、貧農顧元勝じいさんと陸裕宝じいさんがつれだって牛小屋にきて顧さんに階級教育をおこなった。顧元勝じいさんは小さいときから地主の家にやとわれて作男になり、こきつかわれたので腰に負傷したのであり、陸裕宝じいさんは「包産到戸」の迫

害をうけたため気をあせて声がかすれたのである。

「成祥や、お前が村にかえて農民になるのはたいへん結構なことだが、みんなにほめられればほめられるほど、きびしく自分を改造すべきだ。いささかも自己満足してはならんぞ」と二人の老人は顧さんにいった。

それからというもの、顧さんは毎晩休みの時間を利用して貧農・下層中農の家をたずねまわり、かれらに家の歴史、村の歴史、二つの路線の闘争史を話してもらった。これをつうじて、顧さんは、貧農・下層中農が「三自一包」を心のそこから憎んでいることを知った。そして、社会主義の道をすすみ、貧しい生産隊の姿をあらためることの話になると、かれらがたちまち元氣いっぱいになるのをこの目でみた。貧農・下層中農の助けによって、顧さんの階級闘争と路線闘争の自覚は大いに高まった。

顧さんが革命の道を前進していたとき、当時の江蘇省師範学院からきたある男は、顧さんが畑を袖をまき、あげはだしになって公社員たちとともに野良仕事をしているのを見て、「大学生が農民になるなんて、あまりにも惜しいことじゃないか」と顧さんにいった。

「毛主席が、知識青年は農村の広びろとした天地で大いに力を発揮することができる」といわ

れてゐるじゃないか。ぼくが農民になることに惜しいことがあるもんか。ぼくは修正主義のワナにはかからんぞ」と顧さんはきっぱりいって、その男をはねかえした。

それから半年がたった。旧県党委員会の組織部が顧さんを幹部に任用しようとしていることを耳にした生産隊の公社員たちはみな、かれを引きとめた。

「みなさん、安心してください。ぼくがゆくもんか。ここで一生涯革命をやるのだ」と顧さんは笑いながらいった。

「まったくそのとおりだ」と公社員たちはよろこんでいった。

革命の道を勇往邁進する

村で大きな成果をあげた顧さんは広はんな貧農・下層中農から歓迎され、みなはどうしてもかれを生産隊長にえらぼうとした。ところが、顧さんは、生産隊長になると自分の責任が重くなると思った。この問題についてかれは毛主席の著作を学んだ。

毛主席はつぎのようにいっている。「困難な仕事は、われわれの目のまえにおかれている荷物のようなもので、それをつぐ勇氣があるかどうかが問題である。」「荷物は重いのをえら

んでかつぎ、人に先だって苦しみ、人におかれて楽しむ。こうした同志こそりっぱな同志である。』

毛主席の教えはかれをこのうえもなくふるいたたせ、力づけた。かれはみなにいった。

「貧農・下層中農がこれほどぼくを信頼しているのだから、ぼくはかならず誠心誠意貧農・下層中農に奉仕します。みんなといっしょになって社会主義新農村の建設にがんばります。ぼくは社会主義の新農村とともに前進します」

ある晩、貧農・下層中農が牛小屋にやってきて、「成祥や、わしらのこの陸荘生産隊が貧しいというのは、これが原因だよ」といいながら、手織りの手まねをしてみせた。これを見て顧さんはなるほどと思った。生産隊のある公社員が集団生産に参加せず、一日じゅう手織りをし、金もうけをし、集団生産にひどく損をもちた。どうしたらこの資本主義の自然発生的な勢力を撃退することができるだろうか。もっとも強大な武器は偉大な毛沢東思想である。そこで、かれは貧農・下層中農とともに幹部や公社員を全部動員して、毛沢東思想活学活用の高まりをまきおこし、また、みなといっしょになって憶苦思甜（解放前の階級的苦しみを思いおこし、今の仕合わせをかみしめる）をおこない、集団化の道の優越性を大いにたたえ、「三自一包」の

極悪非道な罪行をうったえた。公社員たちは階級闘争と二つの路線の闘争の自覚を高め、集団生産を破壊する階級敵をつまみだし、さかんに資本主義を復活して世をかえようとたくらんだ。こいつの重大な犯罪行為を摘発した。対敵闘争をつうじて、公社員たちは眼力が鋭くなり、自覚が高められ、いままでの誤った思想があらためられた。そして顧さんも深刻な教育をうけた。それらしい、全隊の公社員は心を一つにして団結し、集団を熱愛する模範的な人物と事績がたえずあらわれ、集団生産に生氣はつらつとした繁栄な光景がみられた。

陸荘生産隊の立ちおくれた様相をあらためるため、顧さんは貧農・下層中農に支持されながら、また毛主席の「農業は大業に学ぼう」という偉大な教えにしたがって、公社員たちを組織して大業の貧農・下層中農が自然界に戦いをいどんだ英雄的な事績を学び、大業の貧農・下層中農を手本として自力更生の道をすすんでいる。公社員たちは大いに意気込み、わずか五日間のうちに四十余メートルの深さもある電気ポンプの井戸を掘り、日でりとたたかいたのなかで大きな役割をはたした。顧さんはまた貧農・下層中農の援助をうけて大胆に実験をおこない、春寒にうち勝って、種イモを保存するための二十個のオンドルとプラスチックの布の十個の温床をつくりあげ、春に植えつけるイモの苗をたくさんつちかひ育てた。こうして、陸荘生産隊

は自分の力にたよって、これまで長いあいだ解決できなかった、春に植えつける種イモのむずかしい問題をみごとに解決して、食糧の生産高をいちじるしく増大させ、いままでの食糧の生産高の最高記録を突破したのである。

確固として毛主席のさし示す 輝かしい道をつきすすむ

陳 惠 明^①

わたしはふるい学校で養成された学生です。偉大な指導者毛主席がわたしを裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇の反革命修正主義教育路線の害毒から解放してください、いま牛田洋農場——解放軍という毛沢東思想の大きな学校で再教育をうけているのです。毛主席の「五・七指示」^②の輝かしい光に照らされながら、解放軍同志からの教育と自分の苦しい労働鍛練をつうじて、わたしは毛主席のさし示す革命の道に第一歩をふみだすようになりました。一九六九年の初め、わたしは光栄にも広州部隊毛沢東思想活学活用積極分子代表大会に出席しました。

みずからの実践によってわたしは、毛主席がさし示した、知識分子が労働兵と結びつく方向は青年運動の唯一の正しい方向であるとしみじみ感じました。わたしはいつまでも毛主席がさ

し示した、労農兵と結びつく輝かしい道をつきすすみ、長期にわたり、うやうやしく労農兵を師とおおぎ、その再教育をうけ、ふるい思想を徹底的にあらため、労農兵から歓迎される知識分子になる決意です。

苦しい労働のなかで再教育をうける必要性を理解する

いままでわたしは広東省芸術専門学校で七、八年間も勉強し、修正主義教育路線の害毒をうけて、プロレタリア階級の政治からはなれ、労農兵からはなれ、労働からはなれ、ひたすら琵琶の勉強に没頭し、すばしい両手をきたえて四本の糸を上手にひけば、それで万事めでたしと思っていたのです。

卒業のとき、学校に進駐している解放軍毛沢東思想宣伝隊が毛主席の偉大な呼びかけを伝達し、労農兵と結びつく道をつきすすみ、労働のなかで労農兵から再教育をうけるよう、わたしたちを動員しました。こうして、一九六八年の九月、わたしは解放軍某部隊の牛田洋農場にきて労働鍛練に参加したのです。

牛田洋についたとき、解放軍がわたしたちに最初の授業をしてくれたのは、わたしたちを指

導して毛主席の輝かしい「五・七指示」と知識分子が労農兵と結びつくことについての教えを学習し、わたしたちを導いて「労働でハクをつけるかそれとも労働で修正主義の根っこをとりのぞくか」という問題を討論し、再教育をうけることと労働鍛練にたいして正しい態度をとるよう、わたしたちを援助したのです。解放軍の同志たちは、かれらが毛主席の「五・七指示」の輝かしい光に照らされながら、労働を堅持して思想の革命化を実現したことについての経験を紹介してくれました。これによってわたしは深い教育をうけ、牛田洋にきて鍛練するのは「ハクをつける」ためではなくて、ふるい思想を徹底的にあらため、思想の革命化を実現するためだとわたしは理解するようになりました。

わたしたちが最初に参加した労働は、草とりの仕事でした。水田のなかでくまなくさがしても一本の雑草さえ見つからなかったわたしは、副中隊長になんの草をとるのかとききました。副中隊長はヒエを一本とってわたしに見せながら、これだよ、といいました。わたしはぼうぜんとしてしまいました。ヒエと稲とはたいへんよく似ていて、どうやって見分けるのでしょうか。わたしはくやしくてたまらず、なおいっそう修正主義教育路線を憎みました。わたしを稲とヒエを見分けることができないようにしたのは、修正主義教育路線だったからです。

その後まもなく、駐屯地が強い台風の襲撃をうけ、風力が秒速約三十メートルに達し、海の堤防が重大な危険にさらされていました。解放軍の同志たちは堤防をまもるために風雨をついて海辺へかけつけました。そして、わたしたちの家屋が強風のために揺れうごいていたとき、解放軍の同志たちはまたも危険をもっともせず屋根によじのぼって家屋をまもるのです。ところが、わたしは万一家がくずれて、腕や股に重傷を負って琵琶がひけなくなったら万事休すと心配したので、屋根によじのぼる勇気がなかったのです。台風がすぎたあと、わたしはこれらの問題について毛主席の輝かしい著作「老三篇」をくりかえし学習しました。学習をつうじて、わたしは解放軍の英雄的な行為は輝かしい「老三篇」にはぐくまれた結果だとわかりました。同時にまた、わたしは自分の思想の奥底にブルジョア階級の「私心」がひめられていることもわかりました——なにごとをするにも、まず自分の安危を考え、いざというときには、解放軍のように苦しみを恐れず、死を恐れず、一心に革命のために、すべてを人民のために、することができません。これらのことよって、わたしは知識分子が労農兵から再教育をうける切迫性と必要性を痛感しました。わたしは輝かしい「老三篇」をもって大裏切り者劉少奇の「存命哲学」を思いきって批判し、自分の魂の奥深いところにひめている、一途に個人のこと

を考えるブルジョア世界観とはげしくたたかいました。

海辺で堤防をきずくたたかひなかで、わたしはこう考えました——これは労働を堅持することだけではなくて、毛主席の革命路線を堅持することであり、自分の頭のなかにあるブルジョア思想との闘争を堅持して、劉少奇の「存命哲学」を完全に葬りさることです、と。こう考えたからこそ、わたしは少しもためらわずに、怒濤さかまく海のなかにとびこんで舟を押し下ろをはこんだのです。足が貝がらにかすり傷つかれ海水にしみこまれてひじょうに痛かったときでも、わたしはそれを全然気にせずあくまでがんばりました。そして、疲れたときには、わたしは、「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかおう」という毛主席の偉大な教えを暗唱しながら、疲れをおそれる思想とたたかって労働を堅持しました。

毛沢東思想にはぐくまれ、戦士たちの援助をうけ、たびたびの思想闘争と労働鍛練をへて、わたしのふるい思想は少しずつ洗い落とされ、新しい思想が少しずつ頭の中にはいれるようになりました。このときになって、わたしは、知識分子が労農兵から再教育をうける必要性を体得するようになりました。

苦しい労働のなかで世界観を改造する

わたしたちがはりきって労働していたとき、偉大な指導者毛主席は、「ふるい型の学校で養成された学生は、多数あるいは大多数が労働者、農民、兵士と結びつくことができるのであり、一部の人は発明や創造もおこなっている。だが、正しい路線の指導のもとで、労働者、農民、兵士から再教育をうけ、ふるい思想を徹底的に変えなければならない。こうした知識分子を、労働者、農民、兵士は歓迎するのである」という最新指示を出されました。わたしは労働兵から再教育をうけている自分の実際の体得とむすびつけて、この最新指示をくりかえし学習しました。学習をつうじて、わたしは毛主席の最新指示がこのうえもなく英明なものであり、このうえもなく正しいものであると深く感じました。その一言一句がみなわたしの胸にびんとこたえました。そして労働兵から再教育をうけるわたしの決意をいちだんとかためました。わたしは、自分についていえば、「ふるい思想を徹底的に改造」するということは、何よりもまず「立身出世する」いわゆる「業務第一」という思想をあらためることである、と一歩ずつで理解するようになりました。このいわゆる「業務第一」という思想は、大裏切り者劉少奇の

修正主義教育路線がわたしの魂の奥深いところに植えつけた毒の根っこで、わたしが労働兵から再教育をうけるさいの障害物です。この修正主義の「業務第一」という思想とたたかうことは、実質的には二つの路線、二つの世界観のたたかいにほかなりません。

ヒエをひき抜くさい、指をドロのなかにふかく突っこまなければ、その根っこを抜きだすことができません。このとき、個人の名利思想がまたもや頭をもたげてきました——長年わざわざ切らずにのばしておいた二本の指のながい爪は琵琶をひくさい何よりもたいせつなので、それを何回かドロのなかに突っこんで折ってしまったら、それこそ大変なことです。ヒエを一日ひき抜いたあと、指は赤くなったり、痛みもしました。そのとき、わたしはまた、将来指が粗くなったり堅くなったりして琵琶をひけなくなったら、どうしよう、とばかり考えて、しょげ込んでしまいました。

わたしがしょげ込んでいるのをみてとった指導員は、わたしの活きた思想をつかんでわたしといっしょに「老三篇」を学習し、また、かれ自身の家の苦しかった歴史を話してくれました。それがわたしに昔のことを思いおこさせました。旧社会では、わたしの一家は、いく千円の貧しい人の家と同じようにみじめな境遇におかれていました。父は資本家のところで働き、

一家八人が飢えと寒さにさらされていました。母はつもる苦勞で病氣になりましたが、医者をして招き、薬を買う金もなくそのまま死んでしまいましたのです。その後、毛主席がわたしたちを解放し、わたしたちに幸福な生活をいとまさせてくれたのです。自分は貧乏人の娘で労働を熱愛すべきであるのに、どうして学校に十年間あがってから、勤勞人民をみさげ、労働をきらい、ひたすら「立身出世する」ことばかり考えるようになったのでしょうか。わたしは自分を責めました——陳惠明や、お前はここのやわらかい両手をまもうろとしていますが、それこそ、修正主義の思想をまもうろとしていたのではありませんか。お前は指の長い爪をのばそうとしているが、それこそ、自分の体に修正主義の毒の根っこを残そうとしているのではありませんか。こう考えると、わたしは自分がいままで劉少奇の反革命修正主義教育路線から受けた害毒がいかにひどかったかということ深く感じました。そして決意をかためると、わたしは断然と指の長い爪を切りおとし、新しい姿で除草のたたかいに身を投じました。指は赤くはれ、ヒエを一本ひき抜くごとに痛かったが、草をひき抜くことを頭のなから修正主義の毒の根っこをひき抜くのだと思うと、指も痛いと感じなくなりました。

思想改造の道は平らかなものではありません。指導側はわたしをいちだんとよく鍛練する

ため、こんどはわたしに炊事員をつとめさせました。炊事員はご飯をたき、おかずをつくるほか、ブタ飼いもしなければなりません。だが、わたしにとっていちばん困ったのは、野菜を切ることです。庖丁を手にとると、指が切り落とされはしなやかと心配しました。労働鍛練のなかで指の長い爪が切り落とされたとしても、将来ふたたび伸びますが、指を切り落とされれば、それこそ、何もかもおしまいです、とわたしは思ったのです。わたしの思想にまた変化がおきたとみてとった中隊の解放軍同志は、わたしとうちとけて話し合い、わたしを援助して毛主席著作を学習させました。毛主席はこうのべています。「知識分子が大衆と結合し、大衆に奉仕するには、相互認識の過程が必要である。この過程では、多くの苦痛、多くの摩擦が生じるだろうし、また生じるにちがいないが、みんなが決意をもちさえすれば、これらの要求は達成できるのである。」毛主席の教えと対照しながら、わたしは、自分の「立身出世する」思想がまだとりのぞかれておらず、魂の奥深いところにおける革命が徹底していないことに気付きました。そしてふるい思想を徹底的に改造するには、自己革命を魂の奥深いところでおこない、名利思想を完全に克服しなければならぬと考えました。そこで、わたしは台所にいるときでもブタ小屋にいるときでも、私心とたたかい、修正主義を批判し、偉大な毛沢東思想で自分の魂

の奥底にひそんでいる名利思想とはげしくたたかいました。わたしは水をついだりブタの飼料をかついだりするたびに、それを「革命の荷をかつぎ、心は赤い太陽にむかう」とみていました。そのため、水やブタの飼料をかつげばかつぐほど、ますます元気ができました。こうして、わたしは解放軍という毛沢東思想の大きな学校で政治的營養をとり、前進の力を増し、思想の面でつきつきと勝ちいくさしました。

一九六九年の初め、わたしは広州部隊毛沢東思想活用積極分子講習団にくわわり、解放軍の多くの英雄的な人物といっしょにいて、きわめて深い教育を受けました。某部隊の指導員袁逸先同志は、手榴弾が意外に爆発しようとする瀬戸ぎわに、戦友を救うため、勇敢に手榴弾にとびかかっていって、手榴弾の爆発で右手を折られました。戦友の生命をまもりました。袁逸先同志の英雄的な事跡をきいて、指を切断されるのをおそれ、屋根から地面に落ちて腕を折られるのをおそれていた自分のことを思うと、ほんとうに恥しくてたまらなくなりました。同じく手をもっているのに、解放軍の同志は天地をも震撼させるような事跡をし、毛沢東思想の輝かしい光をはなっていますが、それにひきかえ、わたしはなんとかして手をまもろうとしました。だが、まもればまもるほど、ますます自分のブルジョア個人主義の醜い魂をさらけだ

しました。なんと俗悪なことでしょう。何ヵ月間の労働をつうじて、わたしは、知識分子は世界観を改造しようとすれば、かならず労働兵大衆のなかにはいり、労働兵を師とおおぎ、うやうやくしく再教育をうけ、魂の奥深いところで天地をもくつがえすような大革命をおこなわなければなりません、と痛感しました。

苦しい労働のなかで、文学・芸術を 労働兵に奉仕させる思想をうち立てる

労働と結びつき、労働兵から再教育を受けることによって、わたしは思想の面で新しい生命をかちとっただけでなく、文学・芸術の面でも新しい生命をかちとりました。

部隊にはいつてからまもなく、部隊の指導者はわたしに、文学・芸術の武器をもって毛沢東思想を宣伝するようにといました。「プロレタリア教育革命を実現する」という毛主席の最新指示が発表された夜、わたしはただちに曲譜をつくることにとりかかり、そして随分苦勞したあげく、夜中になってやっとできあがりました。ところが、翌日戦士たちのあいだで演奏してみると、この曲は弱々しくてプロレタリア階級の感情がなく、戦闘的ふん囲気がない、と戦

士たちがいました。わたしは解放軍同志の批判をきいて恥しかったが、心のなかでは納得がいかず、戦士たちは「芸術がわからない」「鑑賞力がない」と思っていました。副指導員は辛抱よくわたしを援助し、階級的立場と階級の感情の面から原因をみつけだすようにとわたしにいました。また、わたしといっしょに、毛主席のつぎの教えを学習しました。「われわれの文学・芸術はいずれも人民大衆のためのもの、なによりもまず、労働者、農民、兵士のためのものであり、労働者、農民、兵士のために創作され、労働者、農民、兵士によって利用されるものである。」「知識分子出身の文学・芸術活動家が自分の作品を大衆から歓迎されるものにするには、自分の思想・感情に変化をおこさせ、その改造をおこなわなければならない。」毛主席の教えによって、わたしはいぜん学校にいたときのことを思い出しました。そのころ、ブルジョア階級の学術「権威者」はわたしを終日琵琶のけいこ室にとじこめて、「世間のことには気をかけず、一心不乱に琵琶のけいこをやらせました」。このような修正主義教育路線の害毒のもとで、封建主義、資本主義、修正主義の感情が知らず知らずのうちにわたしをとりこにしてしまいました。このようなわたしを徹底的に改造せずには、労農兵に歓迎される曲をつくれるはずはないのです。このことによって、わたしは、戦士たちの批判は、ひじょうに正し

いものであり、かれらの深いプロレタリア階級の感情と鮮明な愛憎のプロレタリア階級の立場を反映したものであると考えました。

労農兵と接するなかで、わたしはかれらこそ自分のもっともよい先生だつくづく感じました。毛主席にかぎりなく忠誠をつくすかれらのプロレタリア階級の感情にわたしはよく学習しなければなりません。かれらのかずかずの英雄的な事跡はたえずわたしを教育し、激励しており、わたしは内心の興奮をおさえきれず、ペンをとってかれらを描かずにはいられないし、琵琶をひいてかれらをたたえずにはいられませんでした。一九六八年の秋、もっともひどかった台風とのたたかいのなかで、わたしは、解放軍の同志たちが牛田洋の堤防をまもり、人民大衆の生命財産をまもるために、荒れ狂う波をおそれず、個人の安危をもとせず、いちばん危険なところにつきすすんでいったのをこの目でみました。体の弱い年長の指導者も戦士たちと肩をならべてたたかいました。この感動的な場面からきわめて深い教育とひじょうに大きな激励をうけたわたしは、短い歌劇をかきました。このほか、労働鍛練のなかで、わたしは解放軍戦士をたたえる曲を二十いくつも作曲し、十何回も公演して、戦士たちから歓迎されました。

「琵琶演奏者の感情が変わった。琵琶の音も変わった。革命的ふん囲気がでるようになって

労人民のなかへはいつて鍛練し、改造すべきだ。そうしなければ、プロレタリア革命事業の継承者になることはできないのだ、と考えるようになりました。まもなくして、内蒙古自治区から、山地や農村へいく知識青年を迎えに人がやってきたので、わたしも志望することに決めました。ところがそのとき、一部の人たちが内蒙古へいけば、民族もちがいがいい、ことばも通じず、生活も気候もなじめず、困難がひじょうに多いといっているのを耳にしました。このような問題にどう対処したらよいのでしょうか。毛主席は、「われわれは困難を解決するために仕事をしにいくのであり、闘争をしにいくのである。困難なところほどすすんでいく、それでこそりっぱな同志である」と教えています。いま、わたしの前には重い荷物がおかれています。問題はそれをかっぐだけの勇気が自分にあるかどうかなのです。

わたしは毛主席の紅衛兵です、少しばかりの困難にたじろぐべきではない。毛主席は知識青年に、労働者、農民と結びつく道を歩むようにと呼びかけておられます。わたしもぜひ行こうと心に決めました。

この考えを父母にうちあげ、いっしょに毛主席の著作を学びました。学習をつうじて、父母もわたしの内蒙古行きに同意し、いっしょに学校へゆき、わたしを労働兵と結びつく道へやってくれようにと学校の軍事・政治訓練団にたのんでくれました。

階級的苦しみを永遠に忘れない

一九六七年の冬、わたしたちは牧畜区にやってきました。バスが牧場につかないうちから、貧苦牧民（農村の貧農にあたる階級区分―訳注）が遠路はるばる馬をはしらせ、わたしたちを迎えてくれました。手に手に赤くかがやく『毛主席語録』を高くかかげて「毛主席万歳！毛主席万歳！」と叫ぶかれらの姿に、わたしたちは胸がいっぱいになりました。バスからおりたわたしたちが貧苦牧民からまずたずねられたのは、わたしたちが毛主席にお会いしたことがあるかということでした。みんなは口ぐちに二度お会いしました、三度お会いしました、と答え、毛主席はひじょうにお元気ですと話しました。これを聞いた貧苦牧民はたいへんな喜びようでした。

「わしらはあんたたちがくるのを首をながくしてまっていたんだ。あんたたちは毛主席がよこしてくださった紅衛兵で、草原の新しい牧民だ。さあ、わしらの家へおいでなさい」というのでした。わたしたちはあまりの感激になにもいえませんでした。おもしろい声で

るえて「毛主席万歳！ 毛主席万万歳！」と高らかに叫びました。

草原はすばらしいところです。なによりもすばらしいことは、毛沢東思想の陽光が輝きわたっていることです。赤い太陽は蒙古包^{ポキ}を照らし、貧苦牧民たちの心をも照らしています。貧苦牧民は毛主席にたいしてとても深い感情をもっており、階級敵を心のそこから憎んでいます。わたしたちは牧畜区につくとすぐひじょうに深刻な階級教育を受けました。

わたしのよく知っている桑杰旺という五十をすぎた貧苦牧民は、両眼が失明し、からだじゅうに旧社会で受けた迫害の傷あとがのこっています。かれは病床についていても、よく人に解放前の階級の苦しみを話してきかせるのです。

「わしは、年寄りには、過去の苦しみを忘れず、今日の仕合わせをよくかみしめるように、また若いものには、昔の苦しみを知り、今日の仕合わせをいっそう知るように話すんだ。毛主席がおられなかったら、わしの今日もありはしない。わしは生きているかぎり、また、口をきけるかぎり、毛主席によってもたらされた幸福な生活をみんなに話してきかせるつもりだ」と。

かれはいっしょうけんめいに毛主席の著作を学んでいます。人に読んでもらってはそれについて学び、二ヵ月で、『人民に奉仕する』をすっかり暗記してしまいました。いまでは「老三

篇」のほか『毛主席語録』をいくつもそらんじることができました。

もうひとり、解放前にひどい苦しみをなめていた年老いた牧民は、わたしたちに家庭の歴史を話してくれたとき、まず、毛主席の写真の前でいねいにおじぎをしてから、赤東方紅を大きな声で歌いました。それにはあふれるような感動がこもっていました。そのあと、かれは上着を脱いで、全身に残るおびただしい鞭の傷あとを見せてくれました。それは極悪な封建領主、貴族、牧主（農村の地主にあたる階級区分註）が広はんな貧苦牧民を抑圧し、搾取した鉄の証拠でした。かれは涙をうかべながらつぎのように話しました。

「封建領主と牧主がわしを搾取、圧迫したんだ。わしの半生は牛馬のような生活だった。そのわしを毛主席が救ってくださり、今日のように仕合わせにしてくださいました。わしはいつまでも毛主席に忠誠をつくし、毛主席にしたがって生涯革命をやりぬくつもりだ。中国のフルシチヨフ劉少奇とその内蒙古での代理人は、資本主義を復活させ、わしらにもう一度解放前の苦しみをなめさせようとしているが、わしら貧苦牧民はそんなことを絶対に許さない。若ものたちよ、わしはあんたがたに、毛主席の『階級闘争を絶対に忘れてはならない』という教えをしっかり心にきざみつけてもらいたいのだ」

このようなまなましい階級闘争の事実をつうじて、わたしたちは深い教育を受けました。草原にも階級闘争がはげしくうずまいているのです。わたしたち知識青年はいつまでも階級的苦しみを忘れず、広はんな貧苦牧民としっかり結びつき、愛憎の念のはっきりしたかれらのプロレタリア階級の感情と確固不動のプロレタリア階級の立場に学び、烈火のような階級闘争のなかで自分をきたえ、改造しなければなりません。

貧苦牧民に学ぶ

毛主席はつぎのように教えています。「中国の広範な革命的知識分子は自己を農民に結びつけることの必要性を自覚すべきである。……かれらは熱意をもって農村にはいり、学生服をぬぎすてて粗末な服に着かえ、どんなささいな事もいとわずにそこからやりはじめ……なければならぬ。」

ここにきた当初、わたしたち女子知識青年十人は同じ所に住み、食事も毎日二人ずつ交代でつくりました。ある日、わたしともうひとりの同志の番になりました。その日わたしたちは、なにか大きな仕事でもするかのようになり、早くから起きました。ところが、わたしたちは火さえ

おこせなかったのです、蒙古包のなかには煙がうずまき、すっかりむせて涙がぼろぼろこぼれる始末、やっこのことで火をおこしましたが、なにをつくったらよいのかわかりません。相談の結果、おかゆがいちばん簡単だということで、それをつくってみました。朝ご飯が終わると、みんなそれぞれ、羊や馬の放牧に出かけていきました。午後、みんなが労働を終えてかえってくる時間になりました。晩ご飯はなにをつくらう？ しばらく考えて、朝おかゆをつくれるようになったのだからこの成果をうちかためることにしようということになり、もう一度おかゆをつくりました。みんなはなにもいわずに食べてくれましたが、わたしは、寒い草原で一日働いてきたみんなに朝も晩もおかゆを食わせてすまないと思いました。

なぜこうも無器用なのでしょう？ わたしは、修正主義教育路線に支配された学校を腹の底から憎みました。そこでは、小さいときから労働をさせず、労働大衆からはなれさせ、ご飯がくればはしをととり、着物がくれば手を通すという生活をさせられてきたのです。わたしはここで鍛練を受けられるようにしてください。毛主席に心から感謝しました。ここに根をおろす以上、「どんなささいな事もいとわずにそこからやりはじめ」なければならぬのです。わたしは、半年あまりの実際の鍛練をへて、今ではどんな食事でもつくれるようになりました。

労働をはじめたばかりのころ、わたしはいつも、学校をでた自分にはできないことはなにもない、と思っていました。こうしたうぬぼれは生産労働のなかにもあらわれてきました。たとえば子羊に乳を飲ませたとき、わたしはつぎのような物笑いの種をつくってしまいました。牧民は母羊をつかまえてきて、子羊を母羊の腹の下におしこむようにしてやるのです。すると母羊は乳を飲ませます。わたしは、これはすこしもむずかしくないと思い、母羊をひっぱってきて、子羊をその腹の下におしこむようにしました。ところが手をゆるめたとたん、母羊は子羊をけったり、ふみつけたりして、追いはらってしまふのです。きっとこの母羊がおとなしくないからだめなんだと思って、母羊を何度もかえてみましたが、やはりだめでした。わたしは牧民に教えを乞うほかほなかつたのです。かれらはわたしのしぐさを一目みただけでみな吹きました。もともと、その母羊は、この子羊の親ではないから乳を飲ませないのです。「……多くのいわゆる知識分子は、どちらかといえば、もっとも知識がなく」、「大衆こそ真の英雄であって、われわれ自身のほうがとかくこっけいなほど幼稚である、これがわからなければ最低の知識もえられない、ということ知らなければならぬ」と毛主席は教えています。が、まったくそのとおりでした。その日から、わたしは生涯貧苦牧民の小学生になり、かれら

に学ぼうと決心しました。

ある日、羊を放牧にいったとき、子羊が生まれました。もどる時間になりましたので、わたしは抱いてかえろうかと思いました。だが、子羊はきたないので、服がよごれるのをいとい、ゆっくり歩かせることにしました。もう日が暮れかかっています。牧民のおじさんはわたしをなかなかもどらないので心配して迎えにきてくれました。おじさんは羊を追っているわたしを見ると、「生まれたばかりだから歩けないよ」といい、さっそく子羊を抱きあげました。わたしはとてもはずかしかつたのです。なぜ貧苦牧民にできることが自分にはできないのだろうか？わたしは自分の胸にきいてみました。

うちにもどってから、わたしはこの問題を解決しようと毛主席の著作を学びました。学習をつうじてわたしは、貧苦牧民のなかで生活していながら、自分を牧民の上においていることに気がつきました。つまり、苦しい仕事や疲れる仕事、きかない仕事は牧民がやり、自分は楽な仕事やきれいな仕事をやるのがあたりまえだ、という考えがあったのです。これでは、毛主席が教えているように、思想感情の面から勤労人民ととけあうことができましようか。また勤労人民が自分を身内のように見てくれることができましようか。

またこんなこともありました。年老いた牧民がよごれた服をそとにおいていたので、わたしはそれを洗ってあげようと思いましたが、汚れがいやでなりませんでした。そのとき、わたしは、「もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞ふんがついていても、やはりブルジョア階級や小ブルジョア階級の知識分子よりきれいだ」という毛主席の教えを思い出しました。毛主席はまるでわたしのことを批判しておられるかのようです。そしてわたしはおじさんの服を洗ってあげました。このことをつうじて、わたしは、服を洗ったよりもっと大切なことは、自分のけがれた思想を洗いおとしたということをとりました。わたしは学校にいるころ、汚れや疲れを恐れる考えがあるなどすこしも気づきませんでした。こうして、貧苦牧民と接してみると、わずか数カ月のうちに、思想上の多くの汚れがつきつきにとび出してきました。わたしは、自分を毒した修正主義教育路線を心から憎んでいます。

その後、わたしはなにか問題にぶつかるたびに、毛主席はどのように教えておられるか、貧苦牧民はどのようにしているか、自分はどうすべきかという三つのことを考えるようにしました。

こうすれば自分の行動をみちびく考え方もはっきりし、学ぶべき手本もあるので、自分がどうすべきかがわかります。わたしは自分の言動を毛沢東思想に合致させ、広はんな貧苦牧民の利益と思想感情に合致するように努力しています。

永遠に貧苦牧民のよき継承者となるために

共産党のご恩は天地よりも大きく、階級の友愛は川や海よりも深い。貧苦牧民と接するようになってから、わずか八カ月ほどにしかならないが、かれらとの間にはかなり深い感情をつちかうことができました。去年の春、子羊の分娩期に、それまで寝起きをともしてきたわたしたち十人がそれぞれ貧苦牧民の蒙古包にわかれて住むことになりました。別れるときには、みんな名残りをおしんだのです。だが、貧苦牧民といっしょに一、二カ月も生活するうちに、だれも帰りたいとは思わなくなりました。わたしたちにたいする貧苦牧民の感情もいっそう深くまりました。はじめのころ、かれらはわたしたちのことを、「北京からきた知識青年」といつていましたが、いまでは会う人ごとに、「わしの子供だ」「むすめ」だといって家族のようにしてくれています。

天氣が悪く、風の強い日でした。わたしは五百頭あまりの羊を追って、一キロ半ほどはなれたところへ放牧にでかけました。昼になったが、天気もよくなりないので昼ご飯を食べにもどりませんでした。すると、わたしのうちの六十をすぎたおばあさんがとても心配して、わたしの帰りを待っていたのです。いくら待っても帰ってこないで、おばあさんは「大餅」をこしらえ、紙で包み、また布でくるんで、ふところにいれてわざわざとどけてくれました。おばあさんの心のこもったあたたかい「大餅」を手にしてわたしは、感激のあまりことばが出ませんでした。日ごろ階級の感情は海より深いと口にしてはきましたが、このときはじめて、偉大な毛沢東時代には、祖国のいたるところに家があり、肉親がいるということ、毛沢東思想で武装した貧苦牧民こそわたしたちの身内なのだとつくづく感じました。北京の家をはなれたわたしには、草原にも家があるのです。わたしは北京の父母のもとをはなれましたが、草原の貧苦牧民はみなわたしの父母なのです、と心の底から感じました。

いまわたしは、「農村は広びろとした天地であり、そこでは大いに力を発揮することができ」という毛主席の教えをますます深く理解できるようになりました。階級闘争のなかでも、生産闘争のなかでも、わたしたち革命的な知識青年はより多くのことをしなければなりません。

ん。都市から辺境へやってきて、学生服を蒙古服に着がえて八カ月間、労働者、農民と結びつく道をあゆみはじめました。だが、これは万里の長征の第一歩をふみ出したにすぎず、辺境にしっかりと根をおろすには、まだまだきびしい思想的鍛練をへなければなりません。わたしはいっそう意識的に毛主席の著作を学び、毛主席の教えをまもって、生涯毛主席がさし示す労働兵と結びつく道をあゆみ、たえず、思想を改造しなければなりません。そして、貧苦牧民のようには永遠に毛主席に忠誠をつくし、一生涯貧苦牧民のよき継承者となり、プロレタリア革命事業の継承者となるために自分をきたえてゆきたいと思っています。

注

① 筆者は内蒙古草原の新しい牧民。

毛主席の教えにしたがい いつまでも貧農・下層中農に奉仕する

——いなかにかえった知識青年、毛沢東
思想活学活用積極分子翟秀珍さん

新華社記者

北京市郊外の房山県東南召人民公社路村生産大隊の知識青年翟秀珍さんは、いなかにかえってからの数年間、毛沢東思想を活学活用し、「完全に」「徹底的に」人民に奉仕するという偉大な指導者毛主席の教えにしたがって、人民に奉仕する腕前をみがき、誠心誠意人民に奉仕し、貧農・下層中農からたいへん歓迎されている。

毛沢東思想によつてかの女の心眼がひらかれた

翟さんの家は貧農で、先祖代々から字の読めるものが一人もいなかった。一九五七年、翟さ

んは北京第五女子中学校を卒業して、ある工場で働いていたが、その後病気にかかり、一九六三年に退職して郷里にかえった。家で一年あまり休養し、病気がだんだんよくなったので、村で軽い労働に参加した。このとき、かの女は裏切り者、敵のまわし者、労働者階級の奸賊劉少奇の反革命修正主義教育路線の害毒をうけたため、何年間も学校に上がったあげく、村にかえってありふれた百姓になるのは、「すぐれた才能をもつ人につまらぬ仕事をさせること」だとか、「前途がない」とかと考えて、安心して長いあいだいなか定住する決意がなかった。部隊から復員して村にかえり、党支部副書記と生産大隊長をつとめている王桐さんは、かの女が村で野良仕事をしたがらないのを知って、つねづねかの女に、毛主席が労働赤軍をひきいて二万五千里の長征をおこなった話や邱少雲①、董存瑞②、黄繼光③など革命的英雄人物の事跡、「完全に」「徹底的に」人民に奉仕するという毛主席の教えを話してきかせ、毛主席著作をよく学習するようはげました。そしてまた、王桐さんはかの女に毛主席の輝かしい著作「老三篇」を贈ると同時に、「書物を読むばあい、なによりもまず毛主席の著作を読まなければならない。毛主席の著作は宝のなかの宝だ。なにをするにも毛沢東思想からはなれることはできない」とかの女にいった。

「老三篇」を読んで感動させられたかの女は、くりかえし考えた。

張恩徳④は中国人、ベチューン⑤は外国人だが、二人とも中国人民の解放事業のために自分の生命をささげた。わたしは貧農の娘で、党と国家が中学校卒業までわたしを養成してくれているのに、いま、そのわたしがいなかにとどまって貧農・下層中農に奉仕しようとしなない。これこそ恩知らずではないか。

かの女は「完全に」「徹底的に」人民に奉仕するという毛主席の教えにしたがって、「少しも利己的でなく、ひたすら人につくす」人になろうと決意した。

一九六五年の初め、かの女は家畜の防疫係りになるよう、生産大隊からいわれた。このとき、かの女はまた、娘さんともあろうものが一日じゅうきたない牛、馬やブタなどを相手にするのは、なんとつまらないことだろうと思った。すると王桐さんは「老三篇」をとりだしてかの女といっしょに学習した。王桐さんは、「きたないかどうか、それはあなたの思想いかにかかっている。思想がきたなくなければ、仕事きたなくてもいやがるはずはないのだ」といった。

毛沢東思想によってかの女の心眼がひらかれた。自分の頭のなかにある私心をなげすめて、

防疫係りの仕事をりっぱにやり、誠心誠意貧農・下層中農に奉仕しよう、とかの女は決意した。

貧農・下層中農の必要とするものを学ぶ

偉大な指導者毛主席はつぎのように教えている。「知識をえようとすれば、現実を変革する実践に参加することである。梨の味を知りたければ、梨を変革すること、すなわち自分でそれを食べてみることである。」翟さんは防疫係りになると、毛主席の教えにしたがってみずから実践に参加し、貧農・下層中農に学び、実際の経験をもつ人に学んだ。かの女はまず第一生産隊の飼養場についてブタ飼いをした。その飼養係りで老貧農の梁克明さんは、産後中風にかかっている牝ブタをなおすよう、かの女をよびました。中風にかかっている牝ブタを治療することは、防疫係りになってまだいく日もたない翟さんにとっては、かなり大きな困難であった。しかし、かの女は、「決意をかため、犠牲をおそれず、万難を排して、勝利をたたかろう」という毛主席の教えにしたがって、ブタをなおし、実際行動で貧農・下層中農の信頼をかちとろうと決意した。

あくる日、かの女はブタに飼料をやりながら、書物をひもといいて治療方法をさがしたり、獣医ステーションの人たちに教えを乞うたり、ブタに注射をうち薬をのませたりしたほか、経験をもつ村の飼養係りを訪ねた。

「産後中風にかかったブタをなおすには、ただ注射をうったり薬をのませたりしてただけではだめだ。アワのお粥をつくって食べさせ、丹念に看護してやらなければならんよ」と老貧農の王凱さんがかの女にいった。

これをきいて、かの女はさっそく家からアワを二、三キロもってきて、毎日お粥をつくってはブタに食べさせた。こうして、二週間ほど丹念に看護してやったかいがあって、ブタはだんだん立つことができるようになり、そしてその後時間のたつにつれてますます丈夫になり、子ブタを九匹も生んだ。それからというものは、翟さんはいっそう謙虚になって老貧農に学んだ。ほぼ半年間の努力をへて、かの女は交配、助産、飼養、肥育、優良品種の選別、飼料の調合などの知識を身につけたし、ブタの病気の予防と治療にも多少心得るようになり、また、牛、羊、馬、ラバ、ロバなど大家畜の飼育法とその習性のみこむようになった。

規定によれば、防疫係りの仕事は、春と秋に役畜とブタ、ニワトリ、ウサギなどに防疫注射

をうち、ブタ小屋を消毒することになっていく。ところが、翟さんは誠心誠意人民に奉仕するという思想にみちびかれて、家畜の病気を治療することを身につけようと決意した。生産大隊の幹部はかの女を力づくよく支持し、獣医ステーションの人たちもかの女を援助した。そして一九六六年になると、かの女はブタの多発病や普通病をなおす方法をいちおう身につけ、役畜の一般的な病気も治療することができるようになった。

ある日、貧農の楊明さんが家の牝ブタの難産でかの女に助産をたのんだ。牝ブタはすでに危篤におちいっており、腹を切開して胎児を出さなければたすかることはできなかった。ところが、かの女はいままで獣医ステーションの人がこのような切開手術をしたのをみたことがあるだけで、自分には実践の経験がなく、もしも、やりそこなって牝ブタが死んでしまったら、自分は責任をとわれることになる。ためらっているうちに、かの女は「完全に」「徹底的に」人民に奉仕し、「少しも利己的でなく、ひたすら人につくす」という毛主席の教えを思いだし、個人の損得など気にしないと決心した。かの女は、いぜん獣医ステーションの人が手術をしたときの経過をいちいち思いおこしてから切開手術にとりかかった。切開したあと取りだした一番目と二番目の子ブタはみなまだえ死んでしまった。三番目の子ブタは仮死で、かの女はすこ

しも躊躇しないで人工呼吸法をほどこし、つづいて四番目、五番目の子ブタにも人工呼吸法をほどこして、ついに残りの子ブタを四匹全部よみがえらせることができた。

家畜の病気治療や防疫はたしかにきつてもあるし、苦勞の多いこともある。そのうえ、この仕事をするには、肝っ玉が太く思慮がこまかくでなければならぬ。毛沢東思想にみちびかれ、ひたすら人民に奉仕することを考えている翟さんは、どんなにきつてもまた苦勞の多いことでもぜんぜん意に介しなかった。

たとえば役畜の妊娠検査をするとき、役畜の肛門の内部にある糞便を全部とりださなければ子宮にさわるができない。最初のうち、かの女はきいたなといやがってやる気がなかった。だが、「まだ改造されていない知識分子を労働者、農民とくらべてみると、知識分子はきれいでなく、もっともきれいなのはやはり労働者、農民であり、たとえ、かれらの手がまっ黒で、足に牛の糞がついていても、やはりブルジョア階級や小ブルジョア階級の知識分子よりきれいだ」という毛主席の教えを学習したかの女は、よごれをいやがる思想を克服して、勇敢に役畜の妊娠検査をした。

たえず習慣の力やふるい思想とたたかう

一般の役番は繁殖のために少数の牡をのこしておくほか、すべて去勢手術をしなければ肥えふとらないし、使役するにも不便である。路村生産大隊には去勢の技術を知っている人がいないので、毎年、多額の金をついやしてよそから役畜やブタを去勢する人をまねくほかなかつた。一九六六年の初め、東南召人民公社の獣医ステーションは各村の防疫係りにブタの去勢技術を身につけるよう呼びかけた。そのとき、翟さんは、これは男性の防疫係りにだけ出した要求であって、娘さんはそんな仕事をしないと思っていた。

ところがその後、「われわれのやることは、すべて人民に奉仕することである。そうである以上、われわれに捨てきれないようなよくないものなどがあるであろうか」という毛主席の教えを思いおこしたかの女は、ブタを去勢することも人民に奉仕することだし、光栄なことだから、娘さんもやるべきだと考えた。そこで、かの女は去勢の技術をおぼえようと決意した。

それからというもの、かの女はちょっとでも暇があると、獣医ステーションにいった去勢技術をならい、ときには、みずからもやってみた。こうしているうちに、このことがふるい思想

をもっている村の一部のものあいだでうわさに上がった。それにがまんできなくなった翟さんのお母さんは、「嫁入り前の娘なのに、そんなこと、もうおよしなさい」とかの女にいうのだった。翟さんはこのことであらう悩まされていた。それを知った路村生産大隊駐在の解放軍同志はわざわざかの女の家について家庭会議をひらいた。

「秀珍さんがみずからすすんでブタの去勢技術をならうのはたいへん結構なことではありませんか。これは貧農・下層中農が必要としていることなんです。あなたが秀珍さんによしなさいといっています、それは人民に奉仕するという毛主席の教えにそむいてはではありませんか」と解放軍同志が翟さんのお母さんにいった。

解放軍同志が娘を支持しているのを見て、翟お婆さんも納得がいき、
「そんなら、勇敢にならないさい。折よく家の牝ブタが子ブタを九匹生んだから、まずそれをつかためてみてごらんさい」と嬉しそうに娘にいった。

それらしい、翟さんは去勢技術の習得にいつそう熱をあげた。そしていくらかもたないうちに、ブタ、牛、羊の去勢技術をおぼえた。この二年あまりのあいだ、かの女は村のために無料で二千頭をこえるブタ、百頭をこえる羊、十余頭の牛の去勢手術をしたので、生産大隊と社員

のために多額の金を節約した。

人民に奉仕することはとどまるところを知らない

一九六八年七月、人民解放軍のある医療隊が路村にやってきて、日夜、貧農・下層中農のために針灸で病気を治療してあげた。それをみた翟さんは、もし自分が針灸療法を知っているなら、解放軍の医療隊が村をはなれたあとでも、自分は貧農・下層中農のために病気をなおすことができるのではないかと考えた。かの女はいぜん療養していたころ、針灸の本を読んだことがあるので、一部の経穴を知っている。解放軍医療隊が村に快速針灸講習班をひらくときいて、かの女はさっそく講習班にはいった。

針灸のさい、患者の苦痛を軽減するため、かの女は解放軍同志が聾啞患者をなおすときのようになり、まず自分のからだに針をうつ練習をした。自分にみえない一部の経穴は鏡をつかってうつか、もしくは人にたのんで自分のからだにうつてもらいかした。こうして、ついに針灸でよくつかう経穴を百あまりもさがしあてた。そして、これらの経穴に針をうつとき、どんな感覚が生じるかもみずから体験した。そのときから、かの女は針灸で貧農・下層中農のために病気を

をなおすようになり、村の公社員や幹部はみなひじょうによるこんだ。

公社員の段金鳳さんは下肢の中風で以前治療してみたが、ききめがなく、半年ものあいだ、オンドルからおりることができなかった。解放軍医療隊がきてからかれに何回か針をうってやったが、医療隊が村をはなれたあと、かれは翟さんに針をうってもらった。二ヵ月あまりの治療で、段金鳳老人はステッキをつけて歩けるようになった。老人は人にあうごとに、

「わしのこの二本の足は、たくさんの金をつかって北京の大きな病院で治療してみたが、なおらなかった。ところがこんど、毛主席がおくってきた身内の解放軍が秀珍さんに針をうつことをおしえ、その秀珍さんがなおしてくれたのだ。まったく文字通り、父よりも母よりもっと親しい人は毛主席だ」といった。

もう一人、二年あまりも中風にかかっていた八十をこえた貧農の王おばあさんが、段金鳳じいさんの足がなおったのをきいて、秀珍さんに針をうってもらうようたのんだ。ある日、翟さんは王おばあさんの家にやってきて、王おばあさんが一人でオンドルの上によこたわって動けず、からだじゅうがなんとなくきたなかったのが目にうつった。このとき、張思徳やベチューンの、完全に徹底的に人民に奉仕する精神を思いだした翟さんは、湯をもってきておばあさん

のからだをきれいに洗ってから、針をうった。そして前後あわせて二十七回も針をうった。王おばあさんははじめてオンドルからおりて歩けるようになったとき、涙をこぼしながら、

「秀珍さんや、あなたにどう感謝したらいいのじゃろう」というのだった。

「わたしに感謝する必要はありませんよ。毛主席に感謝しなさい。わたしがおばあさんの病気をなおすことができたのは、毛主席がそう教えてくれたからですよ」と翟さんはおばあさんにいった。それらしい、王おばあさんは人に会うごとに、毛主席が翟さんを教育して自分の病気をなおしたのだといった。

*

*

*

この数年間、翟さんは毛沢東思想の輝かしい光に照らされてたくましく成長し、貧農・下層中農と結びつく革命の道を勇躍前進して、貧農・下層中農に歓迎される人となった。偉大な指導者毛主席がみずからおこし、指導しているプロレタリア文化大革命のなかで、翟さんはふたたび深い教育と鍛練をうけた。かの女は村の革命的小勇将や貧農・下層中農とともに、よく改造されていないひとにぎりの地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子の破壊活動に手痛

い打撃をあたえ、ブルジョア反動路線に大いに造反した。かの女は率先してブルジョア派閥性を克服し、村の二大派別の大衆組織の革命的大連合をうながした。その後、かの女は生産大隊と人民公社の貧農・下層中農代表会議の委員と常務委員にえらばれた。そして一九六九年の春節の直前には光栄にも中国共産党に入党した。

党の九大大会の会議期間と閉会のあと、翟さんは偉大な指導者毛主席をかぎりなく熱愛する深いプロレタリア階級の感情をいだいて、九大大会の精神を積極的に宣伝し、九大大会の文献を真剣に学習し、プロレタリア階級独裁のもとでひきつづき革命をおこなうという毛主席の偉大な学説で自己を武装し、生涯毛主席にしたがって革命をやり、生涯人民に奉仕し、生涯毛主席に忠誠をつくす、「完全に」「徹底的に」人民に奉仕する防疫係りと「はだしの医者」になることを決意している。

注

① 邱少雲は中国人民志願軍一級英雄。一九五二年十月十一日、朝鮮金化の西方で敵の占領下にあった三九一高地に反撃をくわえる戦闘のなかで、かれは全小隊の戦友とともに、闇に

乗じて敵から六十余メートルはなれた地点にふせかかれて翌日の夕方時分に敵に奇襲攻撃をくわえるよう、命令をうけた。翌日の正午ころ、かれは敵の投下したナパーム弾による烈火でからだを焼かれていたが、部隊のかくれている地点が敵に発見されないため、かれは激痛をこらえて微動だにしなかった。そのために全戦闘の勝利を保証したが、かれはついに壮烈な最期をとげた。

② 董存瑞は中国人民解放軍戦闘英雄。一九四八年五月二十六日、隆化を解放する戦闘で、部隊の前進の障害をとりのぞくため、ある橋にある敵のトーチカを爆破する緊急任務をうけた。ところが、かれが橋の下につきすすんでいったとき、爆薬をすえつける適当な場所が見つからず、そしてまもなく部隊が総攻撃をはじめるときの時間になるので、かれは毅然として爆薬をもちあげそれを橋にあてる一方、雷管を力づよくひっぱってトーチカを爆破し、任務をはたしたが、かれ自身は壮烈な最期をとげた。

③ 黄繼光は中国人民志願軍特級英雄。一九五二年十月、全世界を震撼させた名高い朝鮮の上甘嶺の戦闘で、敵の隠べいたトーチカを攻めおとして部隊の前進を掩護するため、かれは重傷をおったにもかかわらず戦闘を堅持した。そして最後には自分のからだで敵の銃眼をふさぎ、部隊が高地攻略の任務を完遂し、敵二個大隊を殲滅するのを保証したが、かれ

自身は壮烈な最期をとげた。

④ 張思徳同志は中国共産党中央警備連隊の兵士であった。一九三三年に革命に参加し、長征にくわわり、負傷したこともあり、人民の利益のために忠実に奉仕した共産党員であった。一九四四年九月五日、陝西省北部安塞県の山中で炭を焼いていたとき、炭焼きがまがくずれたために犠牲になった。

⑤ ノーマン・ベチューンはカナダ共産党員であり、有名な医師であった。中国の抗日戦争を援助するため、かれは医療隊をひきいて一九三八年の初めに中国にやってき、同年の三、四月ごろ、延安をへて、山西・察哈爾・河北辺区におもむいた。ベチューン同志は高度の国際主義の精神、仕事にたいする献身的な熱誠をもって、共産党の指導する八路軍の傷病兵に二年近くも奉仕した。あるとき、負傷兵の救急手術のさいに感染し、治療のききめなく、一九三九年十一月十二日河北省の唐県で逝去した。

労農兵と結びつく道をあゆむ

1970年 初版発行

定価 80 円

出版者 外 文 出 版 社
(北京阜成門外百万莊)

発行者 中 国 国 際 書 店
(北 京 P. O. Box 399)

編号: (日) 3050-2246

3-J-1214P
00043

